

法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-09-03

大きな家：寮にみる現代の集合生活

能登, 千晶 / NOTO, Chiaki

(発行年 / Year)

2008-03-24

(学位授与年月日 / Date of Granted)

2008-03-24

(学位名 / Degree Name)

修士(工学)

(学位授与機関 / Degree Grantor)

法政大学 (Hosei University)

B3775
M35-2
2007-42

2007年度 修士設計

大きな家

寮にみる現代の集合生活

The large home

modern collective living in dormitory

主査 富永 譲 教授

副査 大江 新 教授

副査 渡辺 真理 教授

法政大学大学院工学研究科
建設工学専攻修士課程
スタジオコース
富永譲研究室所属

06R5342 能登 千晶

| | |
|-----------|---------------------|
| Chapter01 | テーマ／「寮」の再定義 |
| | _1 はじめに |
| | _2 目的と背景、設計概要 |
| Chapter02 | 敷地／文化継承としての学生「寮」 |
| | _1 敷地概要 |
| | _2 敷地分析 |
| Chapter03 | 社会背景／「寮」という“状態” |
| | _1 「寮」という“集合” |
| | _2 社会的に崩壊した「寮」の“状態” |
| | _3 建築がつくる“集合” |
| Chapter04 | 設計趣旨／「大きな家」としての「寮」 |
| | _1 「寮」という“状態”を生む |
| | _2 大きな家 |
| | 参考文献 |
| | あとがき |

Chapter01
テーマ theme
「寮」の再定義

- _1 はじめに
- _2 目的
- _3 背景
- _4 設計概要

Preface

In the modern society, it is getting harder to make collective boundary by making physical things like architectures, and people tend to make boundary by depending on the virtual things such as the internet society.

Some people decide the place they belong only by their own thoughts, and make the boundaries with others dogmatically. They exclude the ideas that are different from their idea, and believe only their dogmatic rightness, and when others do not recognize the idea, people tend to take action against society and humanity. Thus, judgments are taken represented with 9.11 terrorism.

Meanwhile, people need to live close to each other with urban planning. Collective living, such as collective housings and housing complexes, is necessary in this modern society.

Physical distance is getting closer, but then mental distance is getting bigger. I would like to bridge this gap between physical and mental distance by redefining and embodying modern "dormitory", the collective living place that people naturally construct relationships with others.

はじめに

現代社会において、集合の枠組みは、もはや建築のような物理的な境界によっては成立することが難しく、インターネットのようなバーチャルな境界によるところが大きくなっている。

自分が何処に属するか、自己のみで判断を行い、他者との境界を独断的に成立させる。自己とは異なる思考を排除して自分自身の絶対性のみを信じ、他者や周囲から認められないと、他者との関係を絶ち、更には非社会的な行為をとるようになる。この、独断的境界の判断が積み重なり、9.11のテロリズムに代表されるような、他者を無視した独断的な行為に繋がっていく。

一方、都市化に伴い、建築を設計する上で、集合住宅や住宅団地のように、物理的距離を縮め、集合させることが必然になっている。

物質的距離は縮まっている一方で、心の距離は広がっている。この物質的距離感と精神的距離感の歪みを、「寮」という集団生活(他者との関係のある生活)が日常的に行われる場を現代社会の中で再定義し、具現化することで埋めたいと思う。

2. Object

“DORMITORYS” have been absorbed into housing complexes or schools, and lost their presence as architectural program. The object is to redefine the “dormitory” as an architectural program of the “situation” that people live naturally with others.

3. Background

There is a trend of preserving architectural programs to bring down the regional culture. People try to leave not only historical values of physical things, but also feelings and atmospheres of the architecture, such as time, emotion, relations with others, sense of distance. Meanwhile, living styles have been changing quickly with time. How we bring down the situation in this changing circumstance? This project is to seek the ways to touch the society to bring down the situations with the architectural design.

_2 目的 object

集合住宅の一部、もしくは学校の一部に吸収され、建築プログラムとしての存在力を失ってしまった「寮」・・・
その「寮」を、他者とともに慣習的に生活するという「状態」の建築プログラムとして、現代社会の中で再定義する。

_3 背景 background

地域的文化の継承として建築的プログラムを保存する働きがある。
ヒトが後世へと残したいことは、物理的なモノの歴史的価値だけではなく、そこに流れる時間や情緒、他者との関係、距離感といった雰囲気大きい。しかし一方で、生活スタイルは時代とともにどんどん変化している。「状況」が変わっていく中で、「状態」をどのように継承していくのであろうか。現代性を受け入れながらも、継承していくべきことを、建築デザインの上でどう働きがけられるのかを模索するプロジェクトでもある。

地域レベルの視点

_ 継承・保存へ

経済成長や都市拡張に代表される“一新”されるような「更新」の時代がある意味で終わりをみせている。この間、何かを得るために働きがけてきたことが、一方で日常から考えると様々なものを失うことにつながっていることに気づいたからだ。なかでも生活の場である「環境や空間の魅力」の喪失は、次世代のひとにとっても負の遺産となるとされ、継承・保存を基盤に経年的更新を前提とした街づくりが当たり前となっている。自治体は景観や街づくりに対しての条例を細かく定め、また私たち自身は「緑の消失や、良好な農地の消滅、高層建築による町並みの混乱・均一化」といった具体的な日常生活にかかわるところでの変化を目の当たりにしつつ来たことで、まちづくりの一員としての自覚が芽生えてきている。

_ 何を継承・保存するのか

継承・保存するといっても何を継承するのだろうか。

街づくりのガイドラインがどんどん細分化されていく中で、気づくことは、「物理的」に守りたいものと、「状态的」に守りたいものがあることである。「物理的」なこと「状态的」なことが相互に関係しあって、その場所のらしさ、文化、地域性という質が生まれている。その“質”を継承・保存するのだ。

都市デザイナー・東京大学大学院助教授（都市工学専攻）の北沢毅氏は、

「私は、いろいろな町を訪れる機会が多いが、よく「どういう町が良い町なのか」聞かれる。「町並みや風景が美しいこと」と話をするがこれとて全国にはさまざまな個性があり一様ではない。そこで美しさのチェックポイントを三つあげるのである。「まずはお祭りが盛んであること。ついで、地酒が美味しいこと。最後は、和菓子が美味しいこと」である。一見、風景や町並みとは関係がない項目であるが、この三つが揃っている町は美しいと感じるのである。

その理由は、楽しさやゆとりがある空間、気持ちが良い空間、刺激的なあるいは創造的な空間」とさまざまに私たちの感性に働きかけるものが必要であること。物理的な空間と人が集い活動することで得られる雰囲気と一体していなければならないこと。実態としての空間の質（狭い意味でのデザイン）と好きとか楽しいといった心に触れる空間の質（広い意味でのデザイン）が融合したものであることなどがある。」と述べておられる。

_ どのように継承・保存するのが*

*北沢毅氏の文章を随所に引用

日本の都市空間の特質は、水平的都市像、あるいは自然との融合、時間の中で移る空間、表と裏、奥行き、などと言われ、それは長い時間の中で蓄積されてきた空間であり共同の感覚であるといえる中で、それらが急速に失われつつあるために、守ろうとする働きをしている今、どう取り組んでいるのかということだ。これは実は、戦後からの動きであるため、すでに二世代の時間が経とうとしている働きであるが、その間にも社会構造が変わり、日常にありふれていることが違うために、感覚としての前提であるはずの共有のイメージを同じ状態、形態でとらえることさえ難しくなっているために、私たちが期待している空間を同じように見いだすことさえ難しいのである。

そのために、国・都市レベルに見ることは概念的に捉え、地域、地区レベルで共有できる形態・状況を明確にしていこうとしている。真鶴町の「美の基準」、千代田区の景観づくり「ガイドプラン」というように空間像（ガイドラインと呼ばれる）を示す具体的に地域に対して制定された条例は、そこに期待される活動（住宅、商業、あるいは雇用、文化、芸術など）が併せてイメージされている。これらは、地区レベルで市民参画によってイメージを共有しながら進められる。ついで小さなプロジェクトを少しずつ加え、最終的には地区のルールとして定着される。そして空間が隅々まで利用されていくこと、その“質”が継承されていくことを願うのである。

さて、ともすると、地域、地区では、資源をどれだけ使いこなせるかがカギにある。歴史的資産については、ともすれば特別な文化財に限定され、その評価も希少性から語られることが多く、自分たちの財産・公共財として市民自らが語ることは少なかったのではないだろうか。私たちの生活文化の尺度、生活を豊かにするという評価軸、地域性からの評価をすべきなのである。これらを継続し、保存、活用、展開することで、環境負荷の軽減になるばかりでなく、地域にとってもゆとりをもたらす。さらに言えば他にはない活動そして産業や雇用の創出にも大きな貢献があり、そうした実例も数多く見られるようになってきた。

建築レベルの視点

(以下、本プロジェクトにおいて「建築」という意味は、いわゆる建造物としての「物理的」なことだけではなく、その周りに生まれる「状态的」なことをも含む。)

_ 継承・保存における現代性とノスタルジー

さて、地域的に文化の継承・保存を行っていくうえで、物理的なことと状況的事実の関係は、昔と今では違うといえるのではないだろうか。建築は、近代において、機能が空間を定め、パノプティコン的に空間形態（「物理的」なこと）とプログラム（「状态的」なこと）が一致していることがほとんどだったために、「物理的」なことの継承がそのまま“質”の継承へと繋がりがやすかった。ノスタルジックになればなれるほど、望まれる継承がなされやすい時代だったであろう。「あの雰囲気はその色、あの形、あの構成から生まれている…」しかし、今や物理的な枠組みによって決定される空間の性格は、予定・期待された状況ではなく、そこにあるモノ・ヒトの関係によってはじめて生まれる。どこで何をするかは、その人次第な時代である。そのために、継承・保存されるべき“質”は、物理的なことにおいてだけでは決して生まれえないのである。

_ 現代の生活

現代において建築、根源である住宅と生活の関係をみる。

都心部の住宅では、部屋や機能のアウトソーシング化が進んでいるのはもはや誰が見ても分かる現状である。その状態を、塚本由晴氏が『INAX 出版 現代住宅研究』の「収納」という章で語っている。

「遠方からの来客があってもホテルに泊まってもらうから、客室はいらない。よっぽど親しい間柄なら居間で寝てもらおう。さらに単身者ならコンビニがあるから冷蔵庫もいらない。食事は外で済ますからダイニングもキッチンもいらないなんて話まである。ついでに、銭湯を使えば風呂もいらないのだが、トイレとか身体を洗うといった生理現象のケアには極端に神経質になってきているから、これは逆に住宅に残される。同じようにトランクルームを使えば収納もいらないのだが、モノの所有は対社会的、相対的なアイデンティティに関わることだからこれも家に残される。結局、住宅を最低限定義するのは、身繕いをし、持ち物を保管し、寝ること、ということになる。すでにワンルームマンションの室内に、そのことの正確な反映を見ることが出来る。だが、都築響一の「TOKYO STYLE」や「着倒れ方丈記」などでレポートされる、溢れかえるものに囲まれて暮らす室内では、「寝ること」と「保管すること」の区別さえ怪しくなっている。・・・部屋の大きさに対する持ち物の多さがある一線を越えると、「寝ること」と「保管すること」、言い換えれば、ヒトがいる「部屋」とモノがある「収納」という区別は無効になり、重なってしまうのではないだろうか。そうすると部屋は収納であると共に、収納は部屋である、ということになってしまう。これは、住宅が狭く、モノが多い現代日本の都心部の一般的な状況に一致する。」

_4 設計概要 outline

現代の生活スタイルの多様さや部屋が物置化していることを前提に、社会問題的に要求される他者と慣習的に関係しながら生活することを「寮」の“物理的”なことと“状态的”なことを明確化することにより提案する。

_4. Outline

With the premise of diversification of modern living styles and that rooms tend to be used like storages, this project suggests to live naturally with the relationships with others by defining “physical” and “situational” things in the dormitory.

Chapter02

敷地 site

文化継承としての学生「寮」

_1 敷地概要

_2 敷地分析

計画敷地 東京都文京区本郷4丁目
敷地面積 2,440㎡
敷地用途 学生寮(100人)
敷地現状 都営アパート
(5階建て 70人)
建蔽率 70%
容積率 300%

敷地を挟んで東西では、標高4000m以上の起伏の差がある。
敷地左手には、白山通り
敷地南側には、春日通りがはしり、
交差点には、春日駅が位置している。

春日駅を境に、
南西方向は、文京シビックセンター、東京ドーム、後樂園と高層化地区開発が進み、都市化している一方で、
北東方向は、新旧混在の住宅街が広がる。



教育のまち、文京の今

— 文京区は、人口約18万2,000人余で、ここ10年ほど都心回帰の波にのり、緩やかに人口が増加している区である。そして、湯島天満宮、根津神社、護国寺などの豊富な史跡、文化的遺産や、小石川後樂園、六義園などの名勝庭園が点在し、さらに、東京大学、お茶の水女子大学をはじめとした16の大学や、多くの教育機関が集積する「教育のまち」として名高いところである。

それを区のポテンシャルとして継承していくために、平成13年7月に「『文の京』の明日を創る」と名付けた、文京区基本構想を策定された。そこには、「これまで、文京区は『文教の府』といわれ、『文化の香り高いまち』をめざして発展してきたのだ。これに寄せる区民の誇りと愛着を大切にしたい。そのうえで、区民と区が、時代の大きな変化に適応しつつ、可能性に富んだこの地を、新たな洗練と成熟の段階へとさらに発展させていく都市自治の姿を『文の京』と呼ぶ」と記述され、区に向かうべき方向を示している。こうして現在、文京区では恵まれた地域資産を保存・継承しながらも、新たな文化を創造・発信するための施策に取り組んでいるのである。

文京区には、繰り返すが江戸幕府直轄の昌平坂学問所が置かれたことで名高い、湯島聖堂があることなどから、世界的にも類を見ない多くの大学や教育機関が集積しており、近代教育発祥の地とされている。古くから先駆的な教育行政の歴史を重ね、現在、教育ビジョンに「個が輝き、共に生きる文京の教育」を掲げ、子どもたちが心身ともに健康で知性と感性に富み、国際社会においても、日本の将来を担う人間性豊かな区民に成長することを目標とした教育の推進に取り組んでいる。

学校教育とともに、生涯学習においても「日本一の教育のまち」を目指し、生涯学習・文化・スポーツに加え、観光振興、国際交流を総合的に展開する「文京アカデミー構想」を策定し大学等とのネットワークを構築し、最先端の生涯学習事業などを推進するため、従来からあった財団法人を大幅に刷新し、指定管理者制度を導入して、構想実現のための体制を整備している。

文京区独自の資格認定講座として生涯学習事業の企画に参画する「生涯学習司」や、展覧会の解説や案内をサポートする「地域文化インタープリター」などの養成講座を開設し、修了者が地域で活躍する場をあらかじめ設定するなどの試みも行われている。



↓ 遊興施設の分布 (戦前、戦後)



↑ 下宿・旅館の分布 (戦前、戦後)

文京の昔_教育環境としての地場産業、宿場、下宿

明治から近代にかけて、文京区は、旧大名屋敷・寺社・田畑が多く残り、教育環境として好ましく、用地の確保も容易であったために、多くの官立、私立学校が設立されたことにより、逍遙、鷗外、漱石、一葉など、多くの文人が住み、この地を舞台に数々の名作を著し、文教の地としての厚みを一層増したといわれる。

東京大学のある本郷の地には、明治末から旅館や下宿屋が軒を並べ、昭和3年には旅館の数は120軒を数え、昭和になってからは、大学の寮が整備されていた。また、地方別県別などの学生寮も多く存在していたといわれている。今日でも旅館業は、本郷の特色の一つとなっている。

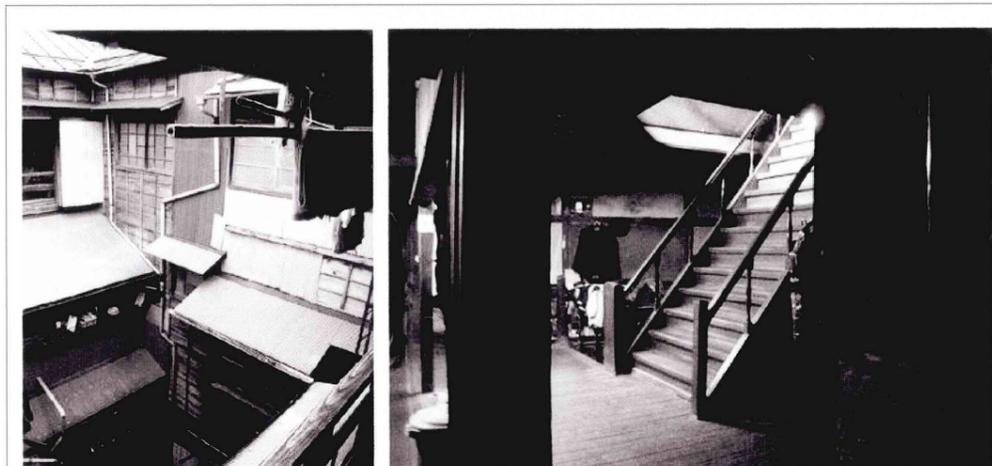
教育地として継承すべき「寮」の存在

昔からのイメージ、教育地としての存在としての力を伸ばそうとする文京。
都市更新スピードが遅く感じられるくらい、変わらない情緒がある。
今も昔も同じ目標を持って地域性を高めようとする文京にとって、
社会的には必要とされなくなり失せつつある「寮」というプログラムも
ここならではの地場産業として継承していく必要がある。

本郷館の解体による「寮」の消失

木造三階建ての下宿屋として、本郷の教育地としての歴史を体現している本郷館が、惜しまれつつも老朽化を理由に、2008年に取り壊される。

その存在に取って代わる、学生の関係性を受け継いだ現代の「寮」が必要である。



「本郷館」
1905年（明治三十八年）岐阜県養老郡根古地（なごじ）の旧家、高橋家により建設。当時は下宿屋と旅館業とが未分化であったことから「本郷旅館」と称していた。養老郡は西美濃、木曾三川の三角州地帯に位置する。本郷には今でも多くの旅館があるが、明治、大正期に本郷に下宿屋、旅館を創業した素封家の多くは西美濃の出身であるといわれている。

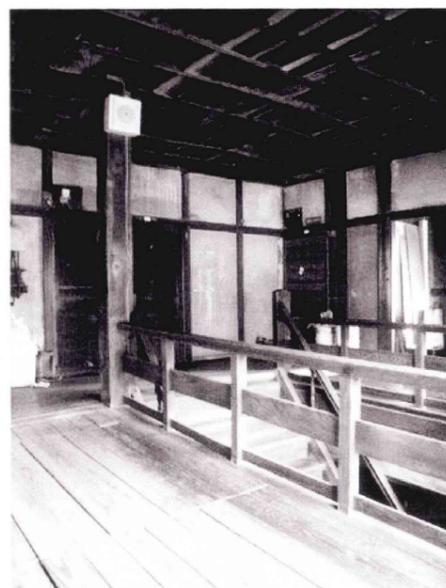
八年後（1913年、大正二年）からの五年間、東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）の寄宿舎として使用されている。1916年（大正二年）以降は、所有者の変遷はあるもの今にいたるまで下宿屋として存続してきた。多数の女中を雇っての簡い付き、上げ越下げ越の高等下宿屋。一室に二、三人が寝起きしていた終戦後の大屋居住期、高度成長期のいわゆる下宿屋。近年では本郷館に惹かれて入居した者たちの居住と、時代とともにその共同住宅としての様相は変化してきている。

個室は四帖から十帖まで計六十八室。共用部分のゆったりとした造りが生活にひろがりをもたせるためか、閉塞した感じはない。当初は二つあった中庭の一つを居室化し、残った中庭に面して共同炊事場、便所等を増築するなど、数々の増改築を経てはいるものの、外観はほぼ変わらず往時の姿を残している。そこにはワンルームマンションには望むべくもない空間の魅力があり、現在でも入居希望者は絶えない。現代の集合住宅における共同性のありかた、生き続け使われ続ける歴史的建造物を考えるとき本郷館は多くを示唆している。

参考文献 日本近代における都市居住形態としての下宿屋の美意識研究―東京・本郷「本郷館」をケーススタディとして（藤江、松山、高橋）財団法人第一住居建設協会 2002
本郷下宿屋出張「本郷館」ローンエッセイ（ナナ）2002



昭和五十年代以前の「本郷館」。元住人を御存知の方は、是非御連絡下さい。
honpro2@yahoo.co.jp
TEL/FAX 03-3823-5797



名残尽きぬ本郷館

100年続く巨大下宿 取り壊し計画

東京・本郷の明治から続く巨大下宿「本郷館」が取り壊される計画が出た。元住人は「名残尽きぬ」と惜しむ声もあふれている。本郷館は、明治38年（1905年）に高橋家により建てられた。当時は下宿屋と旅館業とが未分化であったことから「本郷旅館」と称していた。養老郡は西美濃、木曾三川の三角州地帯に位置する。本郷には今でも多くの旅館があるが、明治、大正期に本郷に下宿屋、旅館を創業した素封家の多くは西美濃の出身であるといわれている。

八年後（1913年、大正二年）からの五年間、東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）の寄宿舎として使用されている。1916年（大正二年）以降は、所有者の変遷はあるもの今にいたるまで下宿屋として存続してきた。多数の女中を雇っての簡い付き、上げ越下げ越の高等下宿屋。一室に二、三人が寝起きしていた終戦後の大屋居住期、高度成長期のいわゆる下宿屋。近年では本郷館に惹かれて入居した者たちの居住と、時代とともにその共同住宅としての様相は変化してきている。

個室は四帖から十帖まで計六十八室。共用部分のゆったりとした造りが生活にひろがりをもたせるためか、閉塞した感じはない。当初は二つあった中庭の一つを居室化し、残った中庭に面して共同炊事場、便所等を増築するなど、数々の増改築を経てはいるものの、外観はほぼ変わらず往時の姿を残している。そこにはワンルームマンションには望むべくもない空間の魅力があり、現在でも入居希望者は絶えない。現代の集合住宅における共同性のありかた、生き続け使われ続ける歴史的建造物を考えるとき本郷館は多くを示唆している。

「改修で」住人要望

東京大学が、本郷区本郷三丁目一丁目から本郷三丁目二丁目にかけて、約100年続く巨大下宿「本郷館」を取り壊す計画が出た。元住人は「名残尽きぬ」と惜しむ声もあふれている。本郷館は、明治38年（1905年）に高橋家により建てられた。当時は下宿屋と旅館業とが未分化であったことから「本郷旅館」と称していた。養老郡は西美濃、木曾三川の三角州地帯に位置する。本郷には今でも多くの旅館があるが、明治、大正期に本郷に下宿屋、旅館を創業した素封家の多くは西美濃の出身であるといわれている。

八年後（1913年、大正二年）からの五年間、東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）の寄宿舎として使用されている。1916年（大正二年）以降は、所有者の変遷はあるもの今にいたるまで下宿屋として存続してきた。多数の女中を雇っての簡い付き、上げ越下げ越の高等下宿屋。一室に二、三人が寝起きしていた終戦後の大屋居住期、高度成長期のいわゆる下宿屋。近年では本郷館に惹かれて入居した者たちの居住と、時代とともにその共同住宅としての様相は変化してきている。

個室は四帖から十帖まで計六十八室。共用部分のゆったりとした造りが生活にひろがりをもたせるためか、閉塞した感じはない。当初は二つあった中庭の一つを居室化し、残った中庭に面して共同炊事場、便所等を増築するなど、数々の増改築を経てはいるものの、外観はほぼ変わらず往時の姿を残している。そこにはワンルームマンションには望むべくもない空間の魅力があり、現在でも入居希望者は絶えない。現代の集合住宅における共同性のありかた、生き続け使われ続ける歴史的建造物を考えるとき本郷館は多くを示唆している。

メガロポリス Megapolopolis

東京大学が、本郷区本郷三丁目一丁目から本郷三丁目二丁目にかけて、約100年続く巨大下宿「本郷館」を取り壊す計画が出た。元住人は「名残尽きぬ」と惜しむ声もあふれている。本郷館は、明治38年（1905年）に高橋家により建てられた。当時は下宿屋と旅館業とが未分化であったことから「本郷旅館」と称していた。養老郡は西美濃、木曾三川の三角州地帯に位置する。本郷には今でも多くの旅館があるが、明治、大正期に本郷に下宿屋、旅館を創業した素封家の多くは西美濃の出身であるといわれている。

八年後（1913年、大正二年）からの五年間、東京女子高等師範学校（現お茶の水女子大学）の寄宿舎として使用されている。1916年（大正二年）以降は、所有者の変遷はあるもの今にいたるまで下宿屋として存続してきた。多数の女中を雇っての簡い付き、上げ越下げ越の高等下宿屋。一室に二、三人が寝起きしていた終戦後の大屋居住期、高度成長期のいわゆる下宿屋。近年では本郷館に惹かれて入居した者たちの居住と、時代とともにその共同住宅としての様相は変化してきている。

個室は四帖から十帖まで計六十八室。共用部分のゆったりとした造りが生活にひろがりをもたせるためか、閉塞した感じはない。当初は二つあった中庭の一つを居室化し、残った中庭に面して共同炊事場、便所等を増築するなど、数々の増改築を経てはいるものの、外観はほぼ変わらず往時の姿を残している。そこにはワンルームマンションには望むべくもない空間の魅力があり、現在でも入居希望者は絶えない。現代の集合住宅における共同性のありかた、生き続け使われ続ける歴史的建造物を考えるとき本郷館は多くを示唆している。

Chapter03

社会背景 Social context

「寮」という“状態”

_1 「寮」という“集合”

_2 社会的に崩壊した「寮」の“状態”

_3 建築がつくる“集合”

_1 「寮」という“集合”

本郷館、東大駒場寮、京大吉田寮、大学浪人中の予備校寮、
地方人が上京した時の県寮、私立中学の寮、社員寮、
世の中にはさまざまな「寮」がある。

寮は、今現在、辞書に

「人がそこで寝食を営むことが出来る場である。
概ね、トイレ・浴場は共同の設置が多い。食事も食堂で朝晩といった具合に提供される。
そうでない場合は、各部屋ごとにバストイレ付き、自炊が可能である。
前者の場合は、賄い人がついて維持管理にあたる。
寮費は、市中の不動産仲介業者を通して借りた部屋やアパートよりも、格安に設定されている。」

と書かれており、「共同」や「集団」という意識が失せつつあることが分かる。
もはや「寮」は、建築プログラムとしても、はっきりとした定義をもっていない。

しかし、「寮」と聞いて、集団生活を切り離して考えることは難しい。
誰もが、個人的暮らしではなく集団で生活することを想像することは、間違いない。

「寮」は、“共に暮らす”という“状態”を定義する言葉なのだ。
“寝食を共にする”といういわば「家族」的生活をする場である。

自分のモノが、自宅のリビングのように、共有の場所にもある“状態”

そして、それを良しと出来る、他者を受け入れる（他者と関係して当然）“状態”

それが「寮」である。

_2 社会的に崩壊した「寮」の“状態”

昔は、「寮」は、建築形態的にも「共に」暮らすことが明らかで、
自分が誰と何を共有しているのか、誰と関わっているのか、
意識的になってしまう状態がそこにはあった。
建築形態と状況が一致していた。

しかし、現代において物理的集合は理念的集合の台頭によって力を弱め、
建築形態は多様なニーズに対応できることが求められるのである。
さらには、共同生活の需要の減少と、個性の乱立に対応すべく、
寮は、共同生活としての建築形態を失わざるおえなくなった。

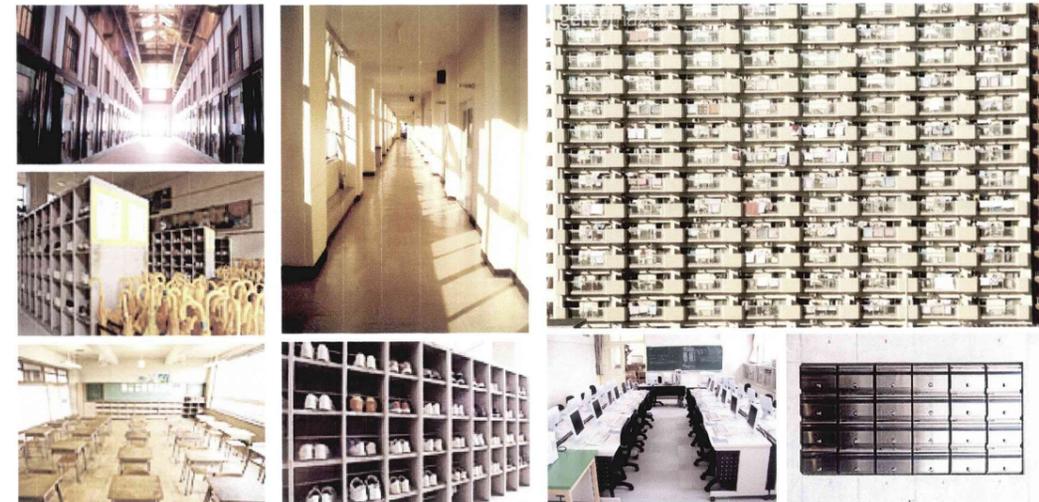
今や「寮」は、複数人の生活が形態的に集まる集合住宅的な様相と、
完全教育プログラムとしての学校的な様相しか見せていないのが現状である。

_3、建築がつくる“集合”

寮が建築形態的に定義できず、
建築プログラムとしても定義できず、あくまで“状態”を表現するのならば、
建築（物理的なことと状況的なこと）はどのように具現化されるべきか。

プログラムと形態が結びついて、集合状態をつくっているものは多くある。

集合住宅、
学校、
刑務所、
病院、
・・・



それは、何を集合させ、どんな状況をつくりえているか、

- ・ヒトとモノとの関係
- ・連続している集合
- ・何と何が分けられているのか（境界）
- ・建築が定義できていることは何か

・・・
といった観点で分析を行った。

Chapter04

設計趣旨 Design concept

「大きな家」としての「寮」

_1 「寮」という“状態”を生む

_ phase 1-a モノ / 収納
1-b 収納 / 寮

_ phase 2-a モノ / 境界
2-b 境界 / 状況

_ phase 3 形態

_ phase 4 収納 / 領域

_ phase 5 建築的領域

_2 「大きな家」

_ phase 0

_ phase 1

_ phase 2

_ phase 3

_ phase 4

_ phase 5

_1 「寮」という“状態”を生む

「寮」という“状態”を、以下の視点から紐解き、デザインする。

_ phase 1-a モノ / 収納
 1-b 収納 / 寮

_ phase 2-a モノ / 境界
 2-b 境界 / 状況

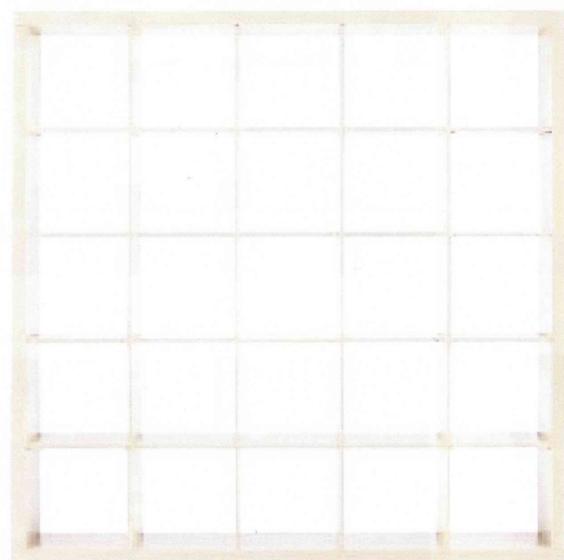
_ phase 3 形態

_ phase 4 収納 / 領域

_ phase 5 建築的領域

_2 大きな家

_ phase 1-a モノ / 収納



モノが「機能」をつくる モノがソコをソコたらしめる モノが周りの性質を決める

コピーペーストされた集合住宅の部屋のように、美術館のホワイトキューブのように、真っ白な空間に機能や環境、雰囲気を与えるのはモノである。

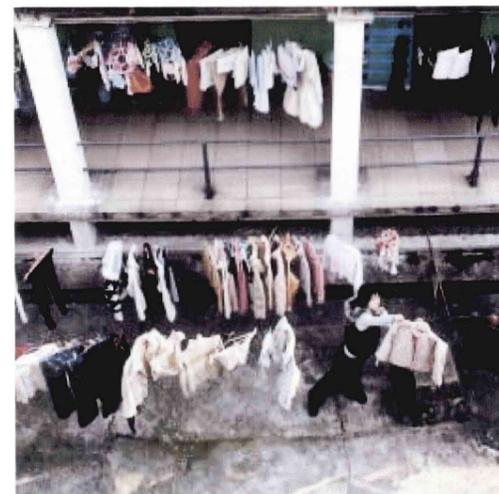
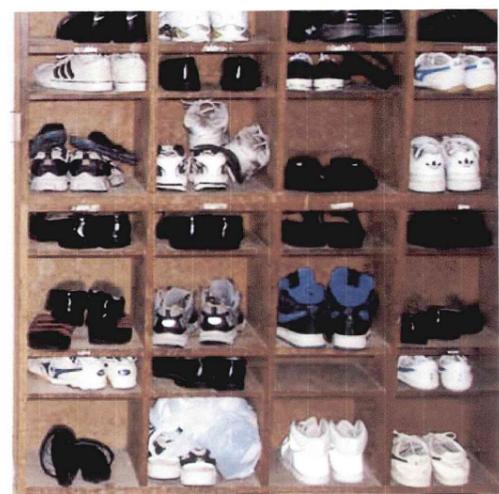
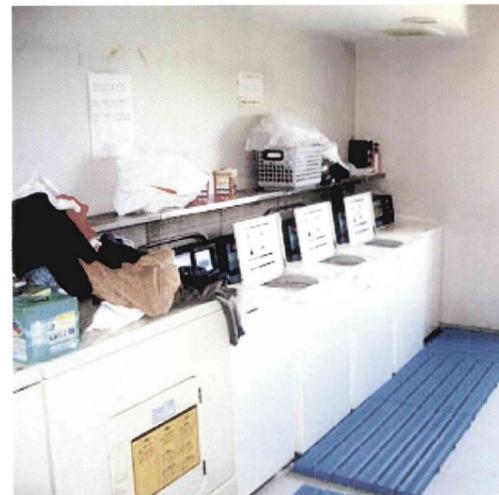
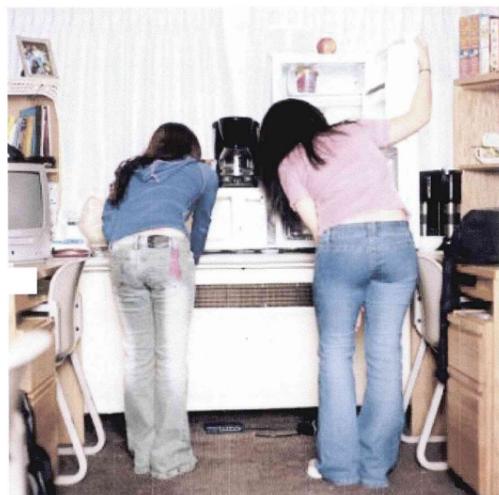
そこがリビングなのか、ダイニングなのか、ベッドルームなのか、部屋はそこにモノが置かれてはじめてその名前で呼ばれることができる。

「こう使う場所だよ。」十分な大きさが与えられ銘打たれたその部屋の中にちゃんと収まる生活は成立しなくなった現代、

部屋は、モノが在る場所=収納=ヒトを体言化するモノの集積となり、そのモノによって場所性を獲得する。

_2 大きな家

1-b 収納 / 寮



寮において、収納=モノが在る場所が全てを構成する。
寮という“状態”は、収納の連なりによって出来る一つの大きい収納である。
実家の自分の部屋とリビングの関係のように、自分の所有する部屋という物理的に規定される空間には制限されず、モノは共有する場所へとあふれ出す。
部屋ではなく、モノによってできる「収納」という場所がはじめて個人を表出させるが、
散らばった個々に明確な物理的境界はなく、寮という一つの大きな収納の中に、モノによってその場所性を生み、テリトリーをモノによって暗示する。
寮という状態は、他者を家族のように意識しあい、その相互関係の中で「モノ」によって自分の居場所を存在させ、同時に自分の存在を伝えることである。

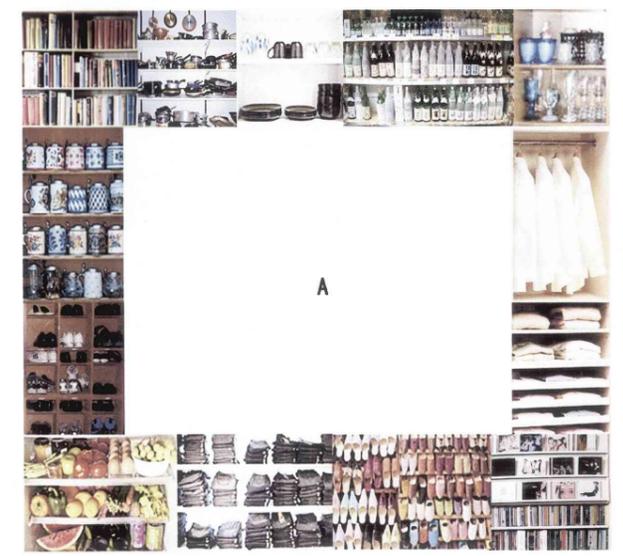
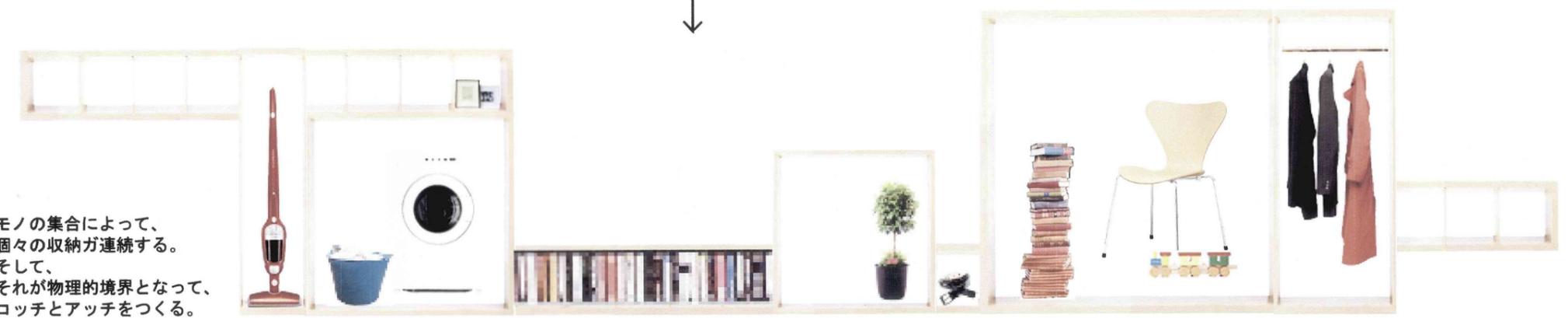
寮は、大きな一つの収納である。
寮は、大勢のヒトが集団で生活をする。
大勢のヒトのモノが集まる。

_2 大きな家

_ phase 2-a モノ / 境界



モノの集合によって、
個々の収納が連続する。
そして、
それが物理的的境界となって、
コッチとアッチをつくる。



その収納の連続が環状をなして、
収納に囲まれた空間 (A) と収納の周りの空間 (B) をつくる時、
その収納にあるモノは、双方から同じ見え方をしない。
なぜなら、自分を取り囲むモノが違うために、
ABは、モノによって生まれる場所性が違う空間となるからである。

B

_2 大きな家

2-b 境界 / 状況



家の中の状況



chair



sofa



TV/MOVIE



table

例えばAが個人所有のモノに囲まれた空間で、
Bがパブリックなモノに囲まれた空間ならば、

その境界にあるモノは、周囲の他のモノとの関係から
違う状況を作り出す。

同じ行為が、モノによってできあがる場所性の違いで、
二つの状況を生む。

モノの扱われ方が変わる。

モノの集合による収納の連続が環状をつくるとき、
その収納は、
違う状況の境界として存在する。



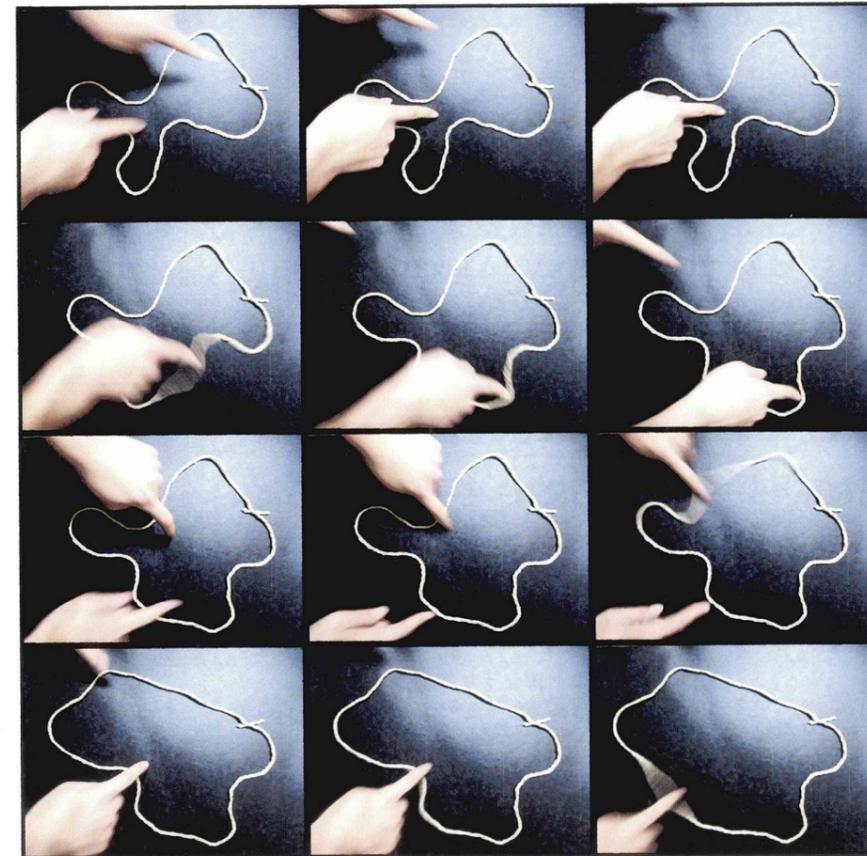
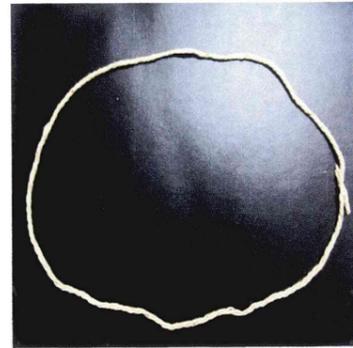
公共の状況



_2 大きな家

_ phase 3

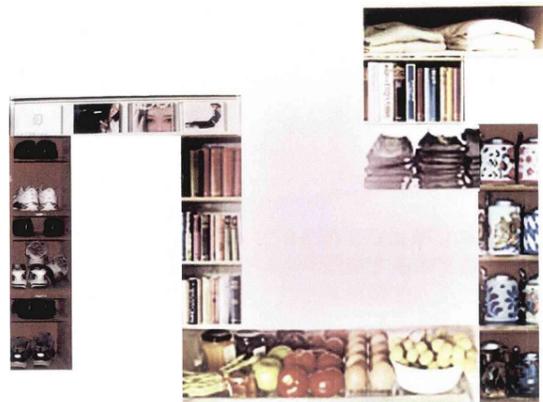
形態



収納（モノがある場所）の連続が環状を成して、大きな一つの収納＝「寮」をつくる時、
寮生が内から与える刺激
（モノおく、機能が決まる、モノによって領域が生まれる）と、
公共、周辺環境といった外から与える刺激
（公共全体の意思によりおかれたモノ／公園、道、自然が育んだモノ／地形）
によって形態が出来る。

_2 大きな家

_ phase 4 収納 / 領域



「状況」のインテリアとエクステリアを生む

収納が境界となり、モノがおかれて生まれる領域は、その置かれたモノによって状況が違ふ。

S字型に収納を組むことによって大まかに出来る領域は、寮生のモノによって状況の違いが生まれ、隣り合う領域、境界の向こうに領域に影響を与えることとなる。

開いていたり、閉じていたり、長細かったり、深さがなかったり、そう見えるけれど、区切りもなければももとの形態に使用方法は決められていない。

どっちにベッドを置くか。むしろ、ベッドをどう使うかまで考えて収納のアッチを使うのかコッチを使うのか状況次第で選ぶ。

寮は一時性に富む。

- ・寮生、住人が不確定である。
(望んで入ってくるとも限らない)
- ・変化のスピードがはやい。
(隣人が変わりやすい)
(短い期間しか居ない)

そのことを寮の特徴的部分として前提に据え、領域の変性をさらに肯定的に捉える。

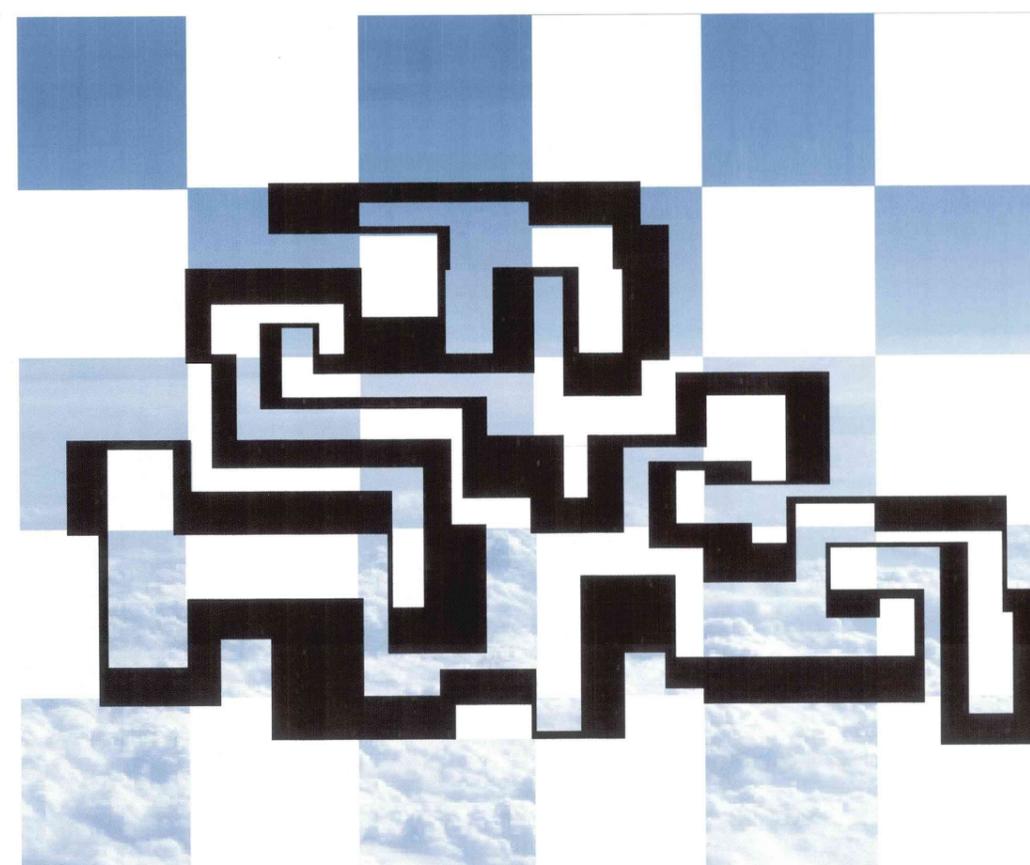
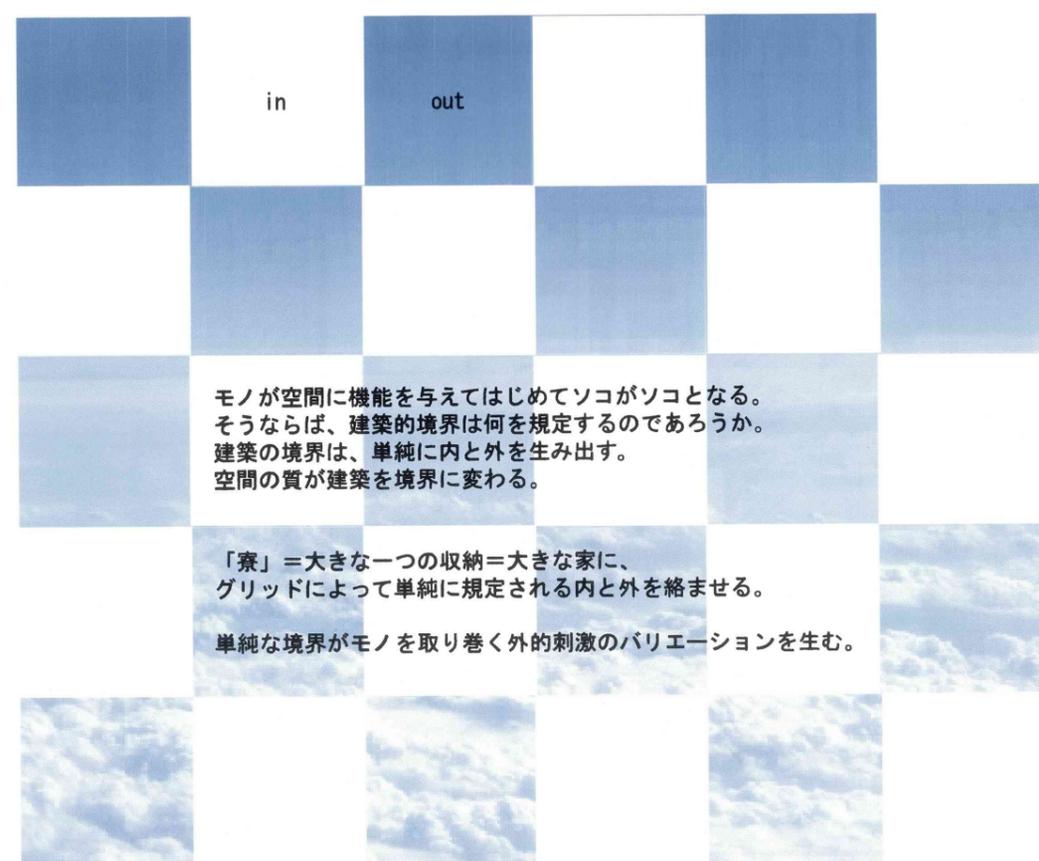
隣に誰が暮らしているのか、誰と一緒に暮らしているのかを意識しながら状況、領域をつくることとなる。100人いれば100通り、一人入れ替われば、全体の関係が一新される可能性をはらんだ時間的バリエーションをもつ。

_2 大きな家

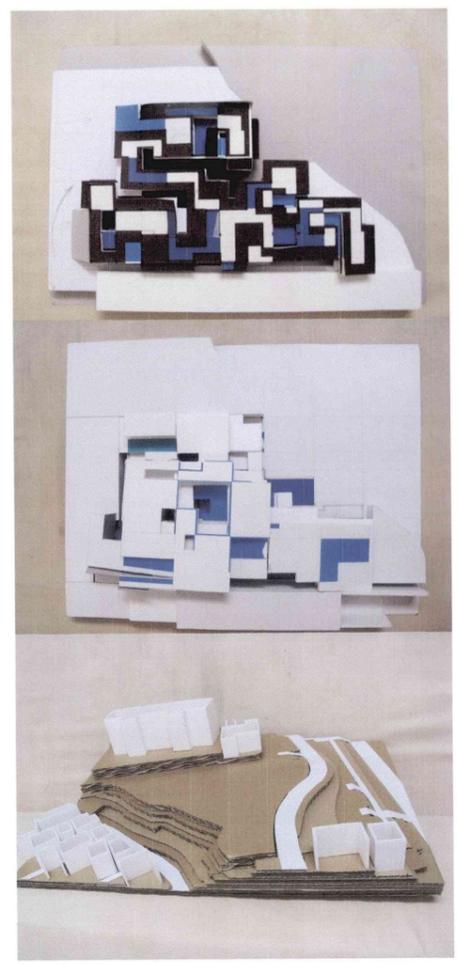
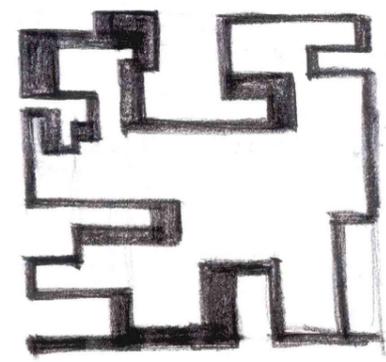
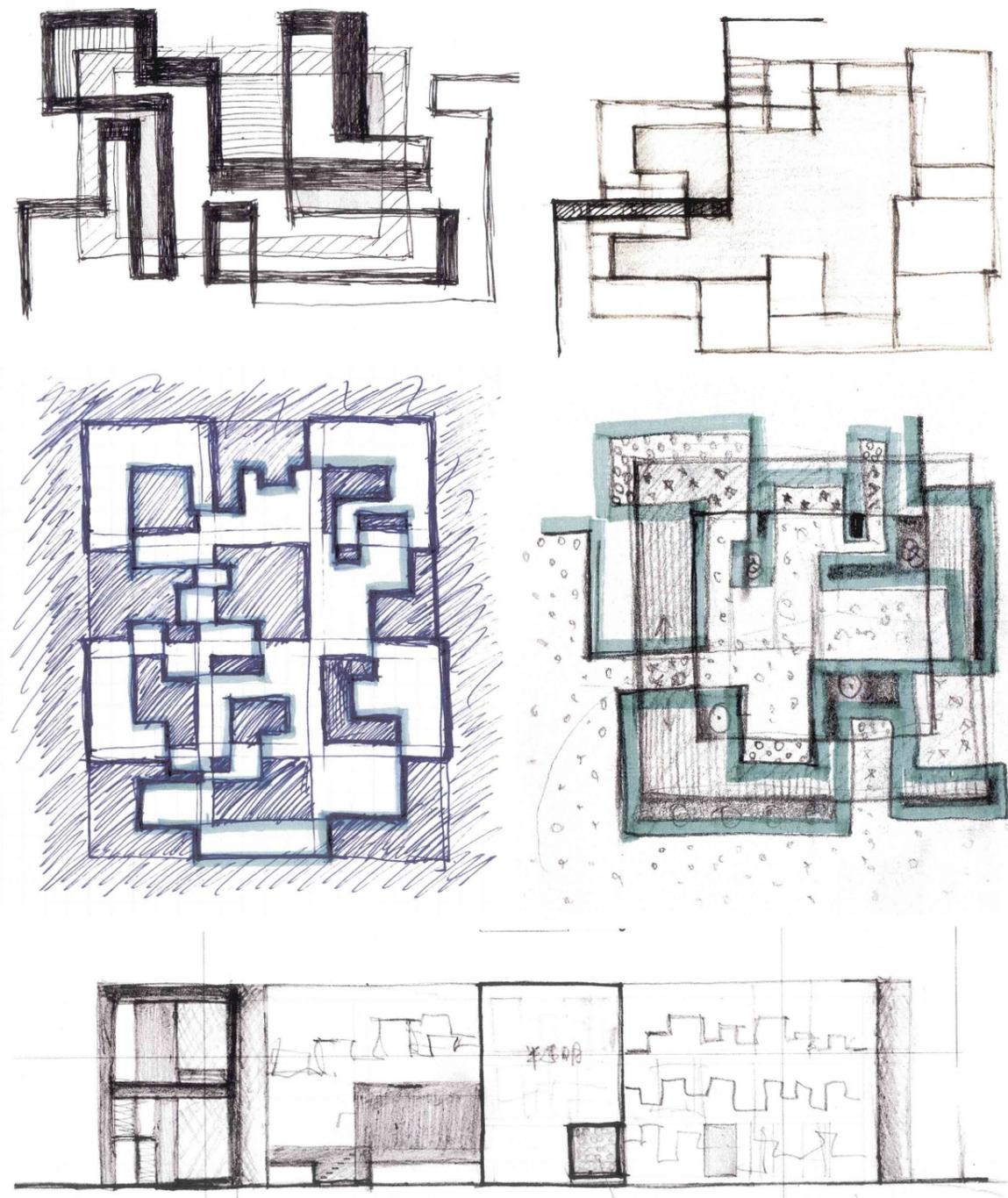
_ phase 5

建築的領域

(物理的) 建築のインテリアとエクステリア

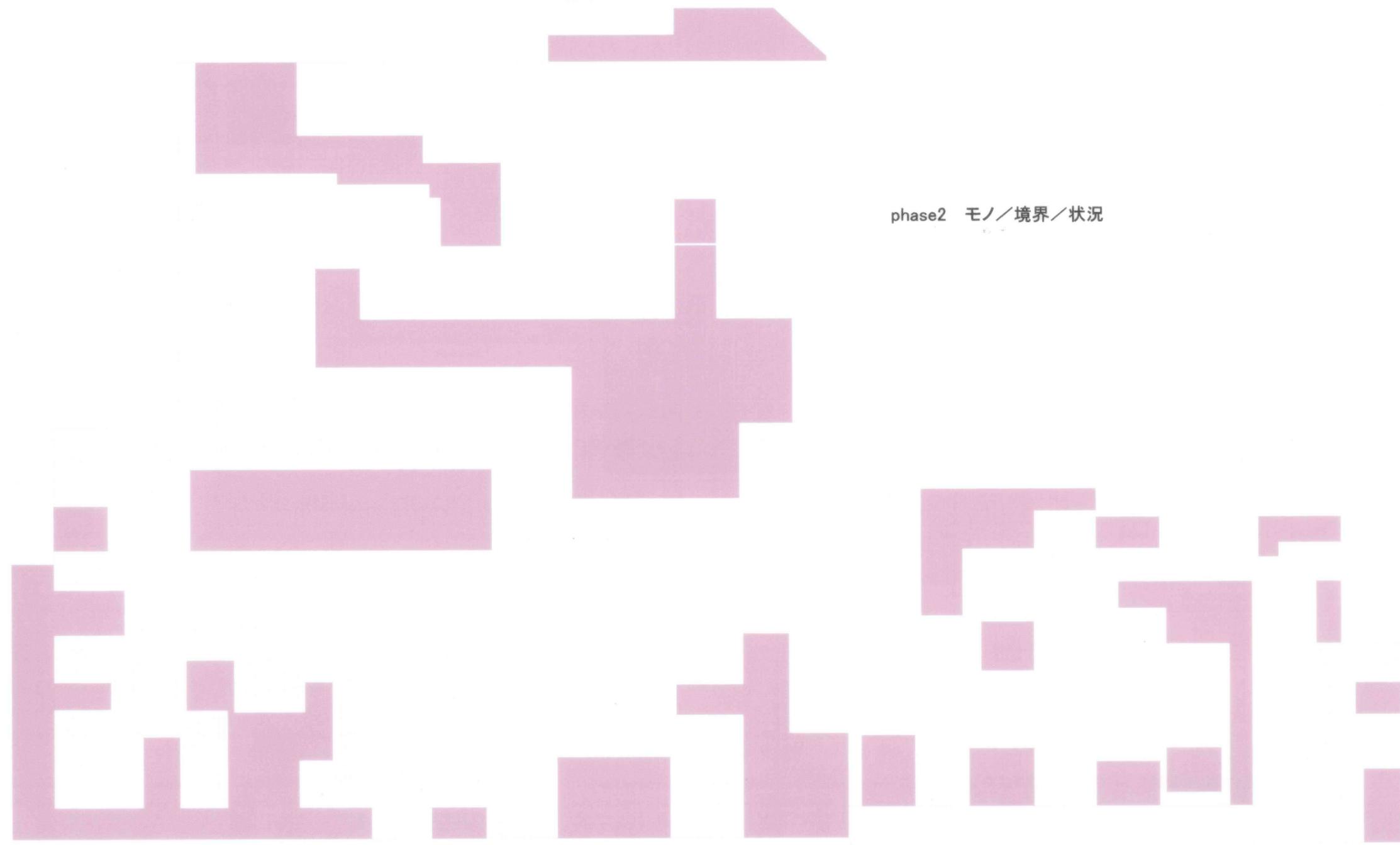


_2 大きな家





phase1 モノ/収納



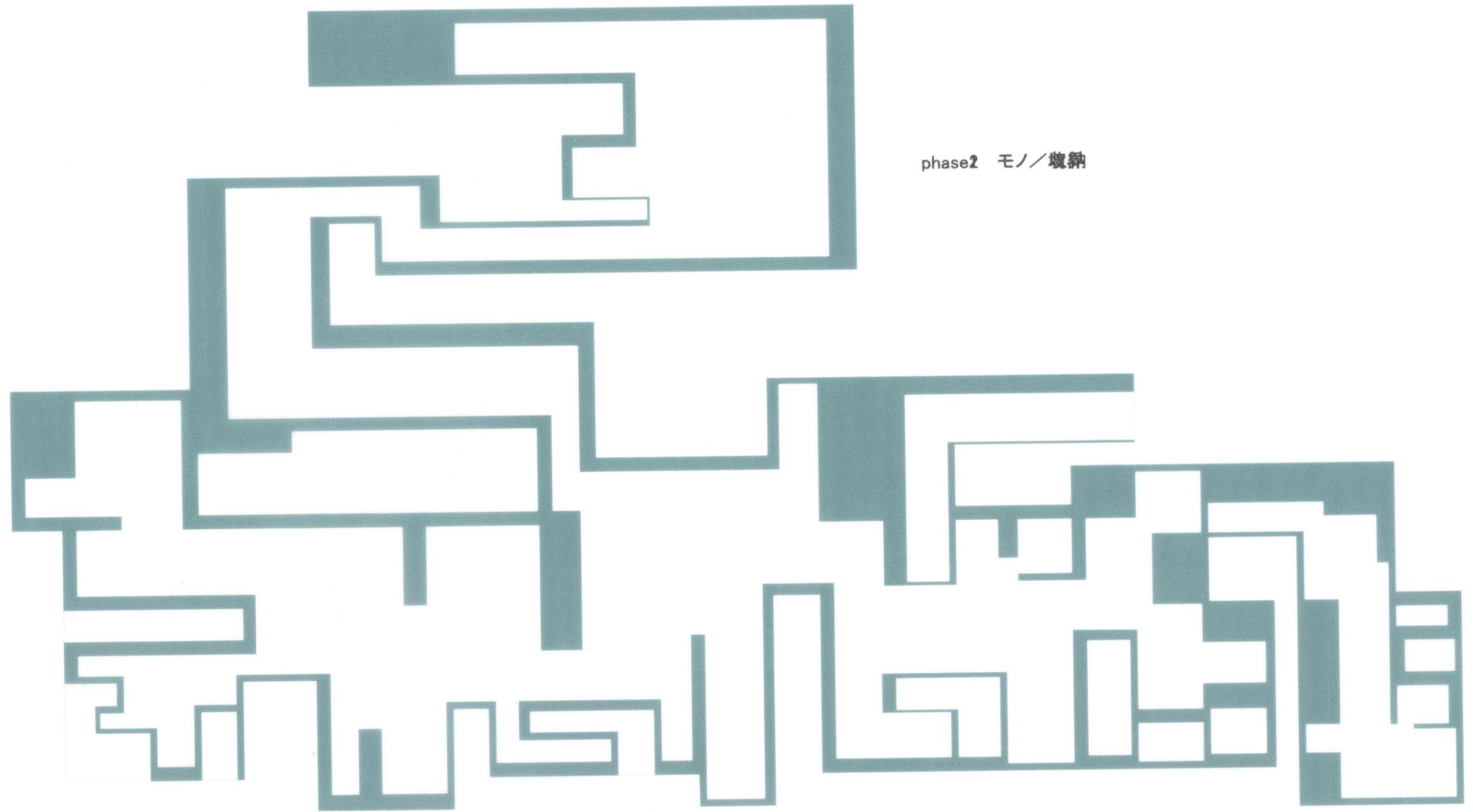
phase2 モノ／境界／状況

2 大きな家

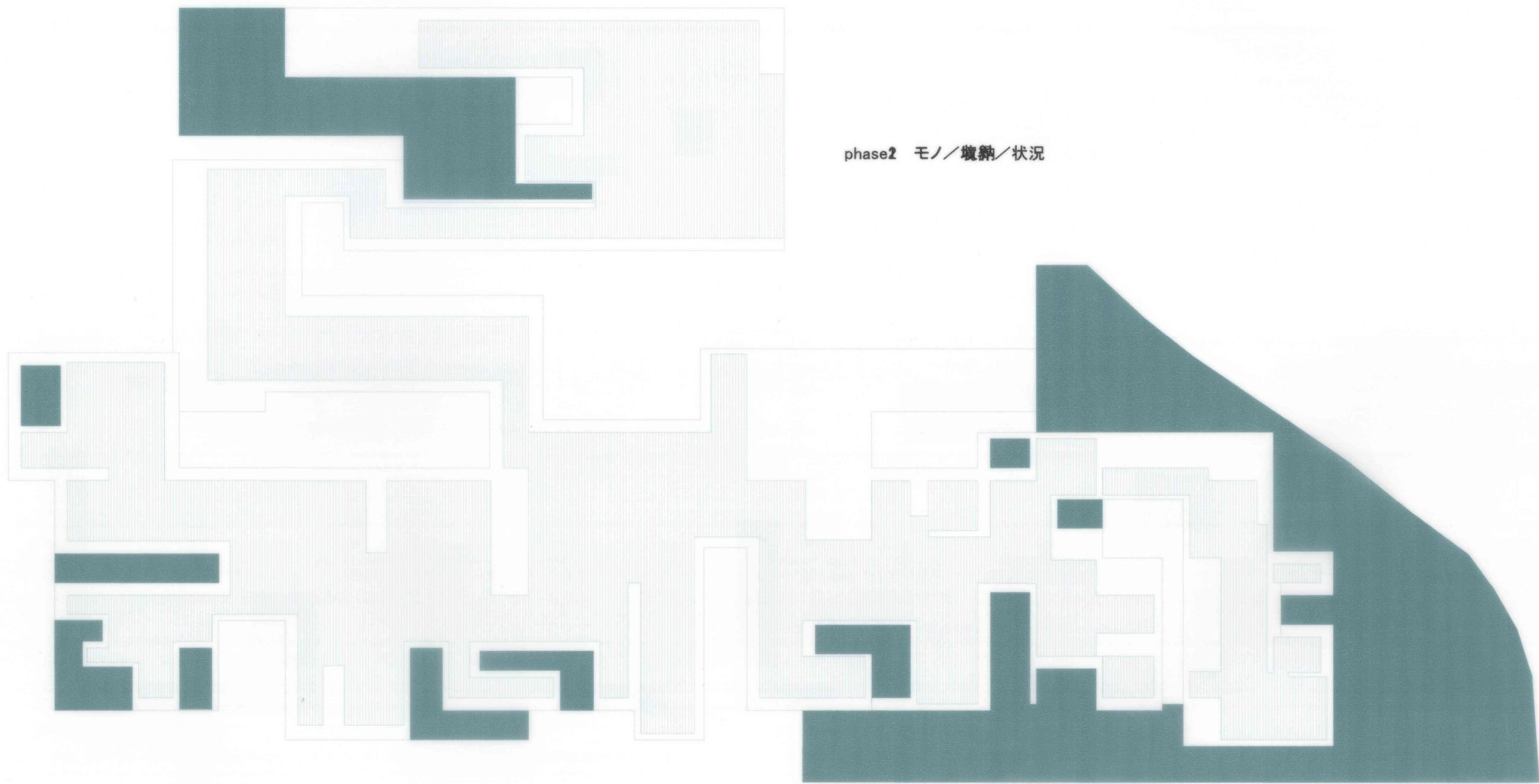


plan 1 (h=+0)

s=1/200

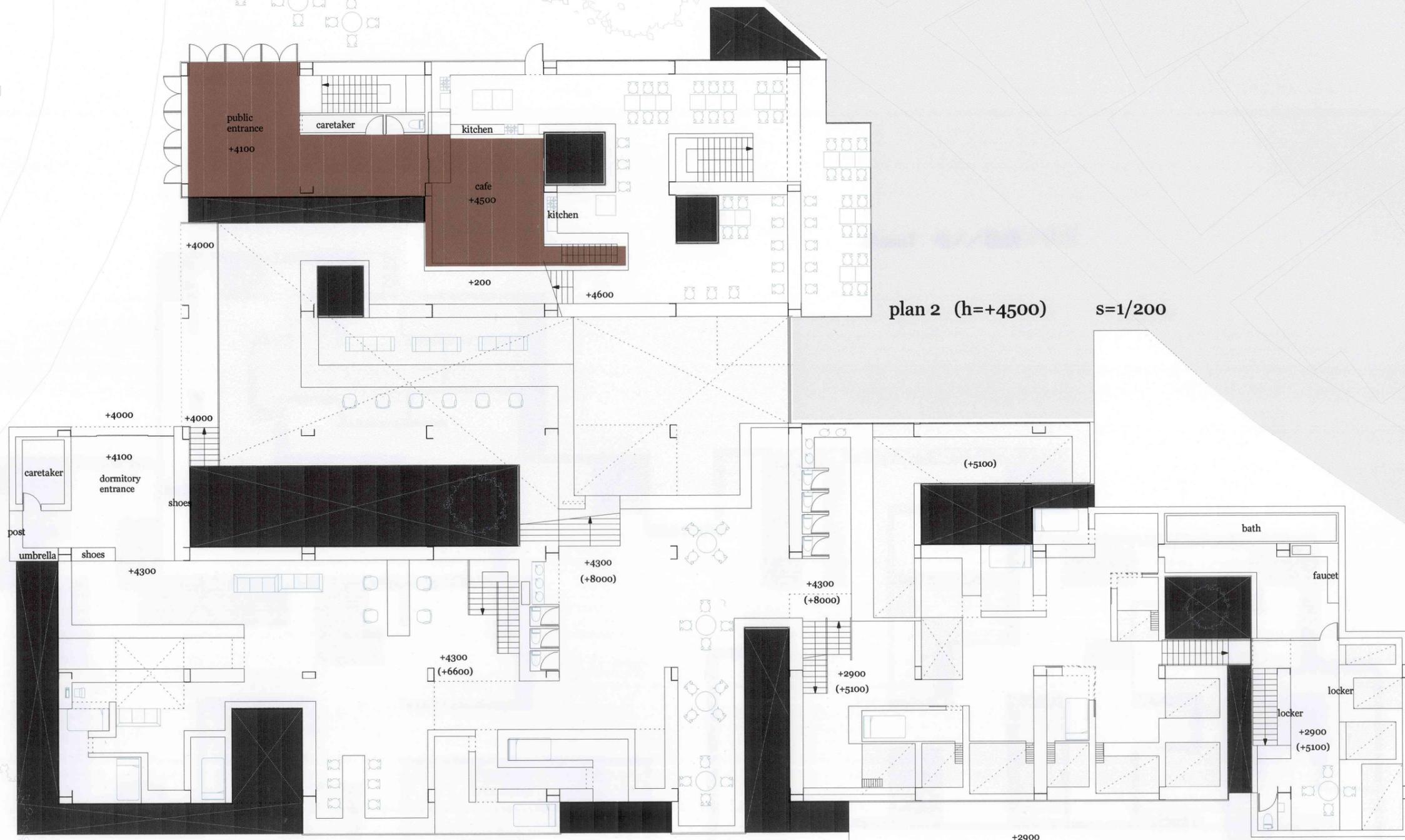


phase2 モノノ境納



phase2 モノノ境納状況

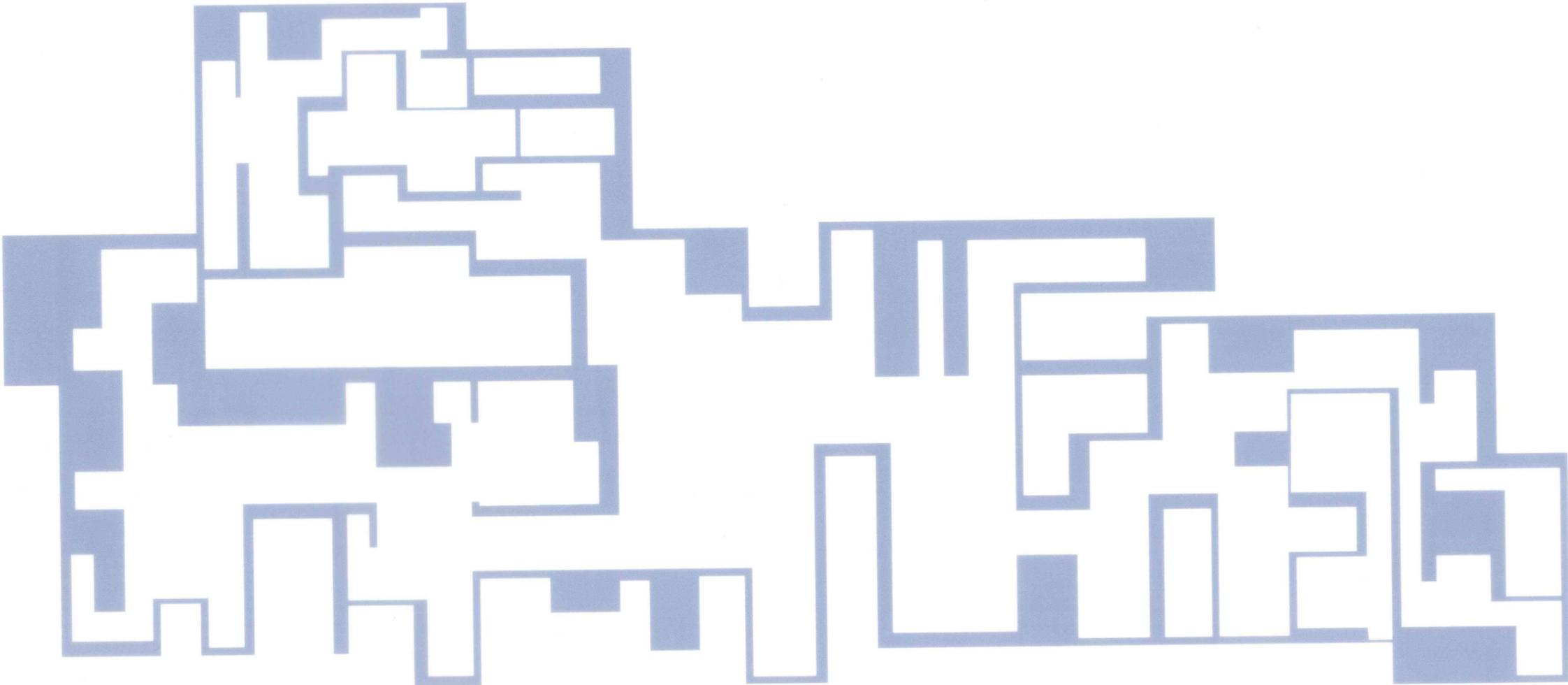
2 大きな家



plan 2 (h=+4500) s=1/200

+2900

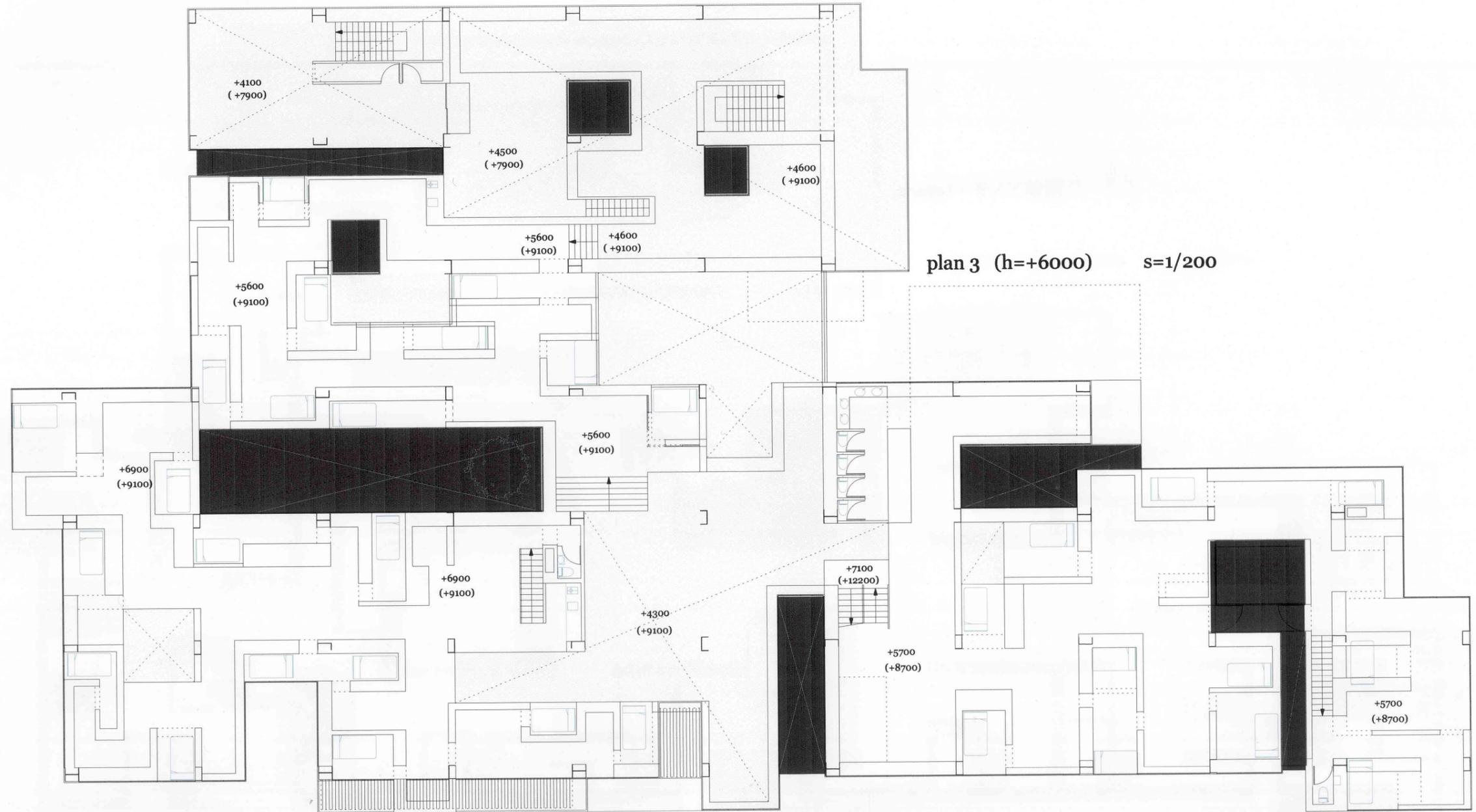
phase1 モノ／収納



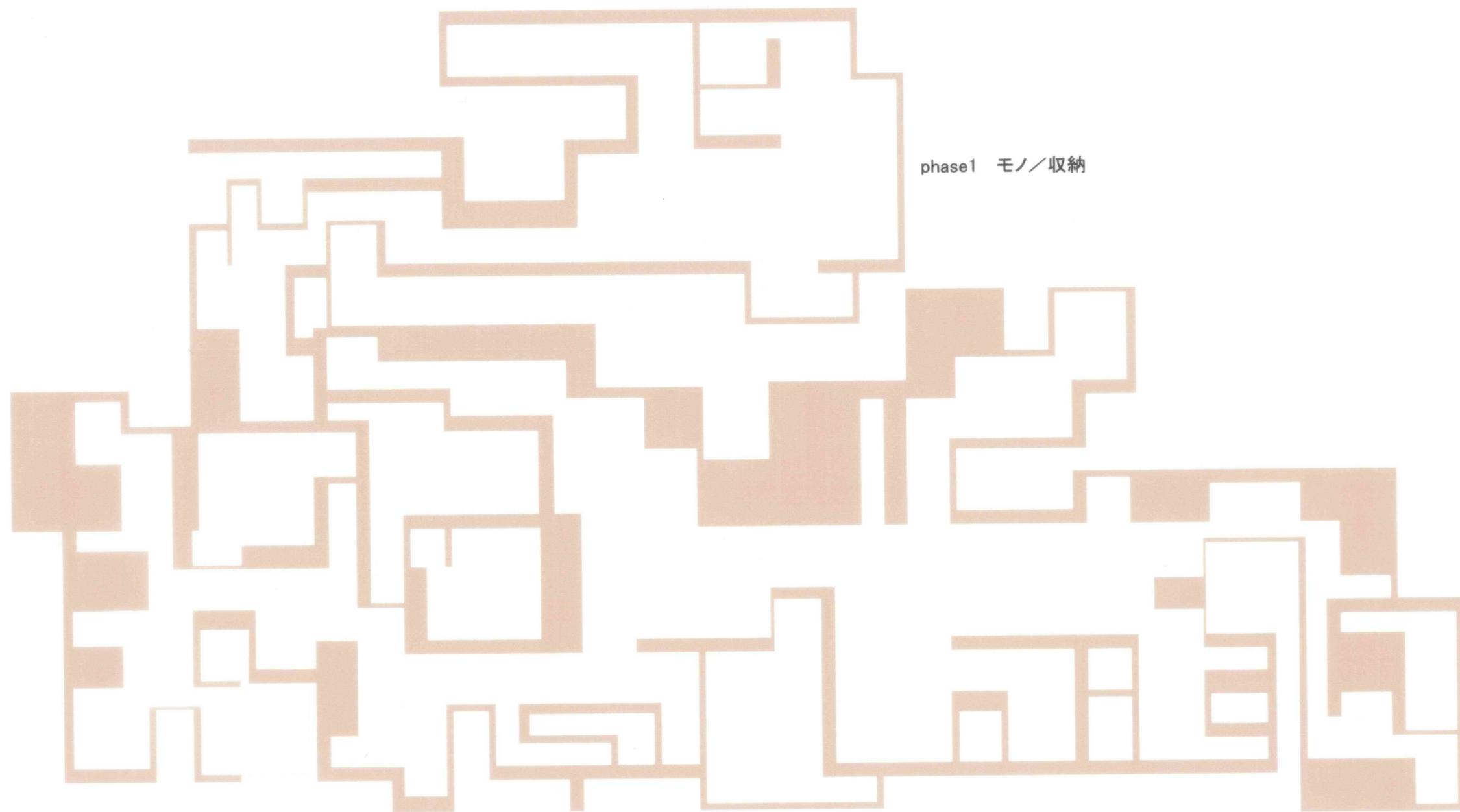
phase2 モノノ境綑ノ状況



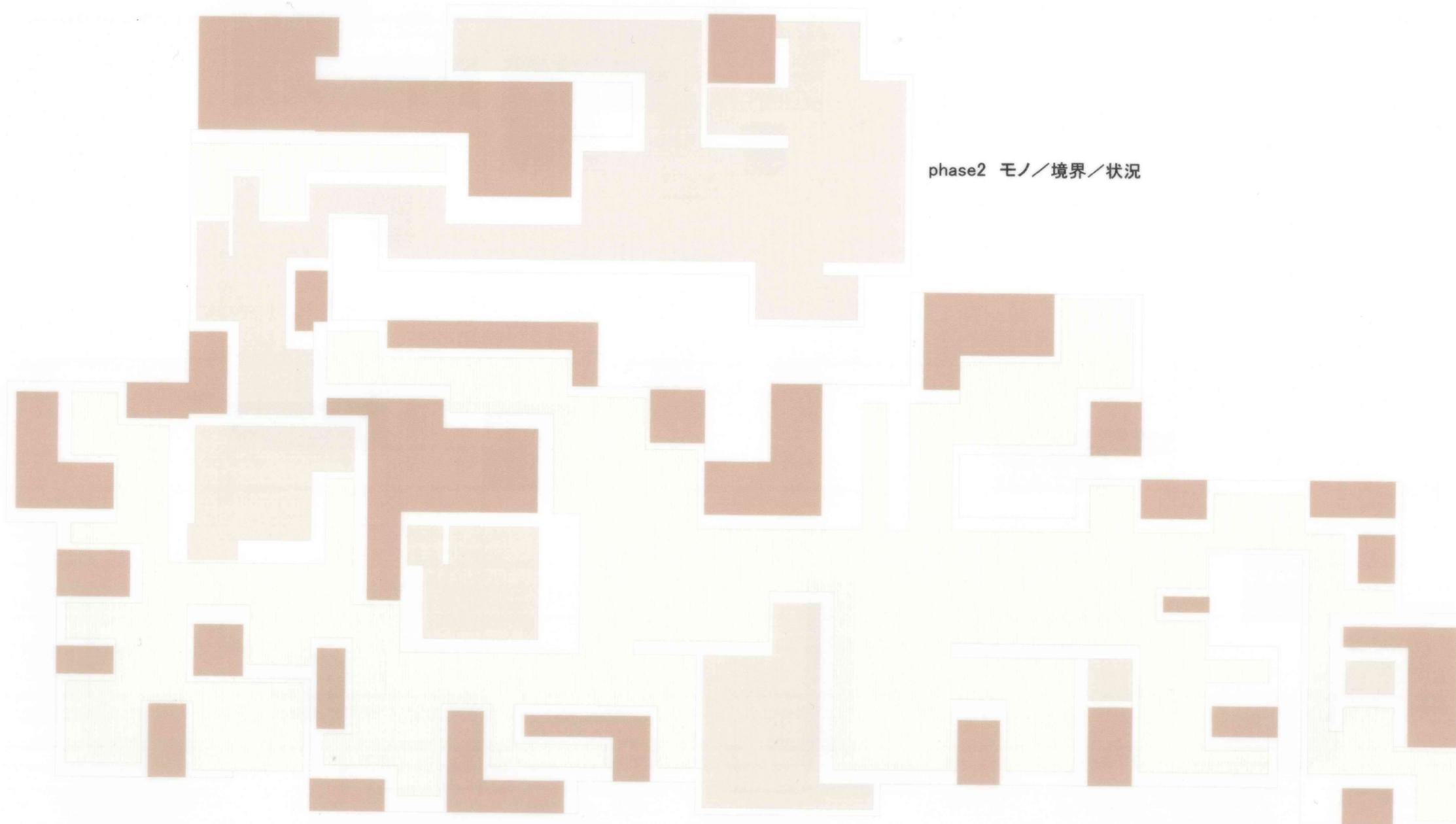
2 大きな家



plan 3 (h=+6000) s=1/200



phase1 モノ／収納



phase2 モノ/境界/状況





+4000

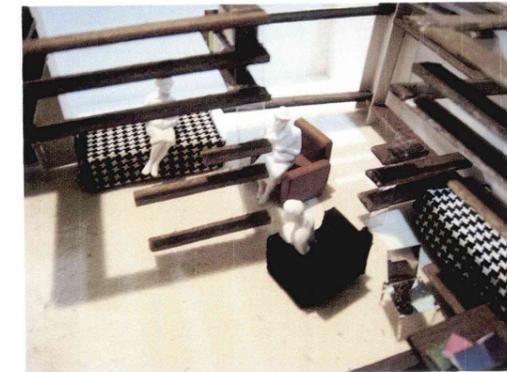
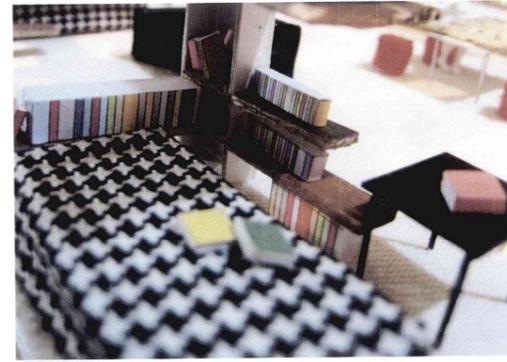
+0

phase3 形態

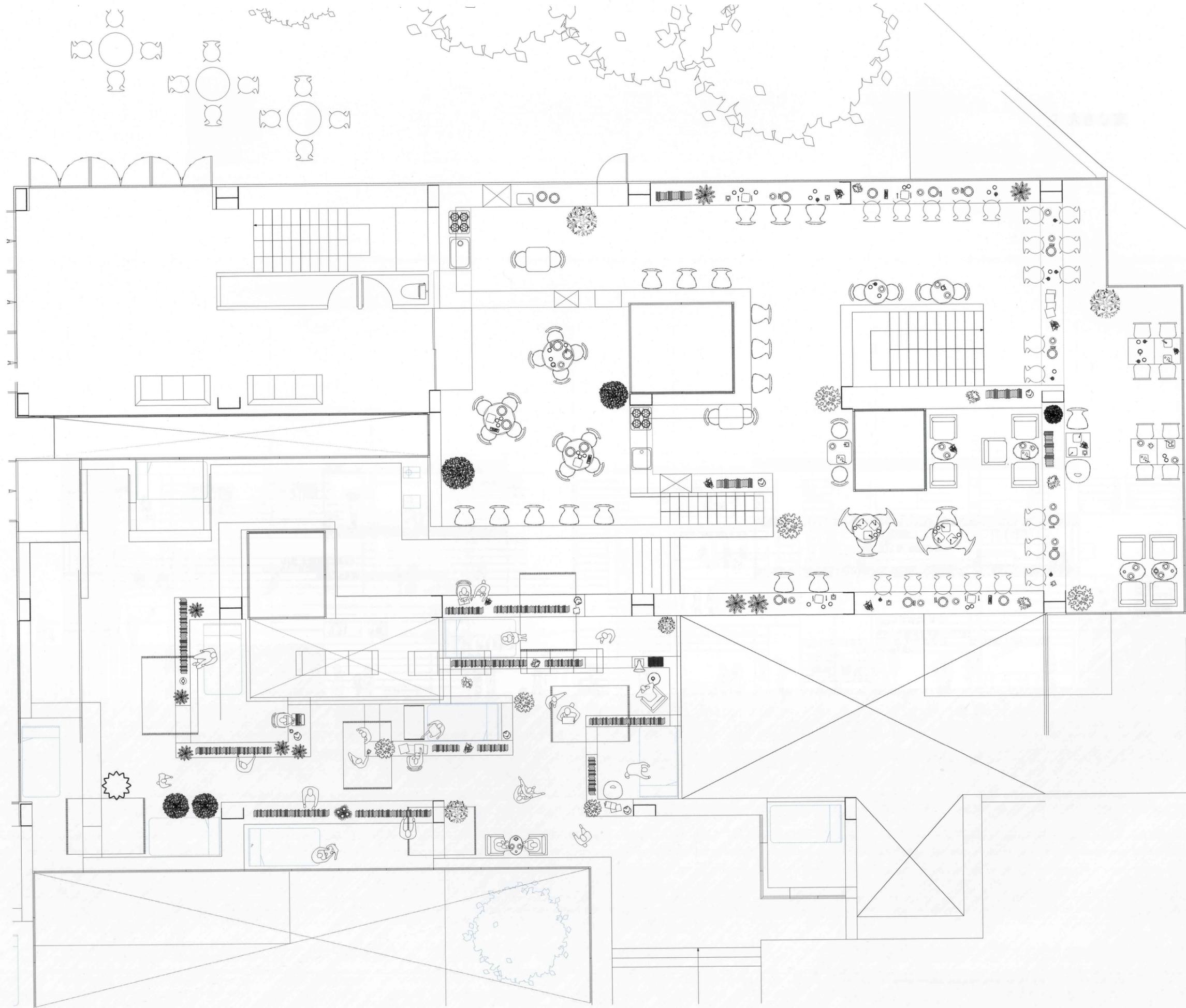
siteplan

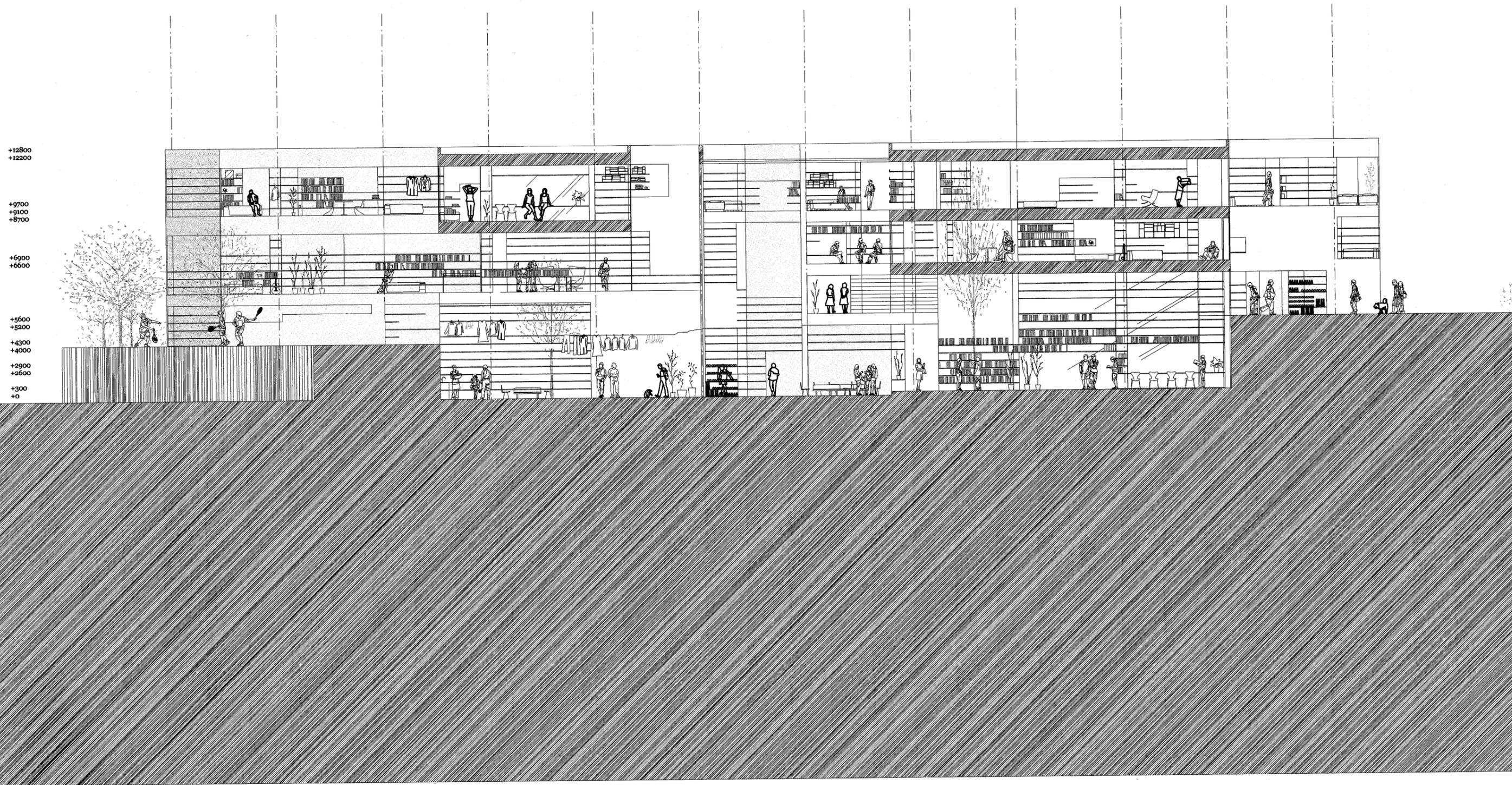
s=1/500

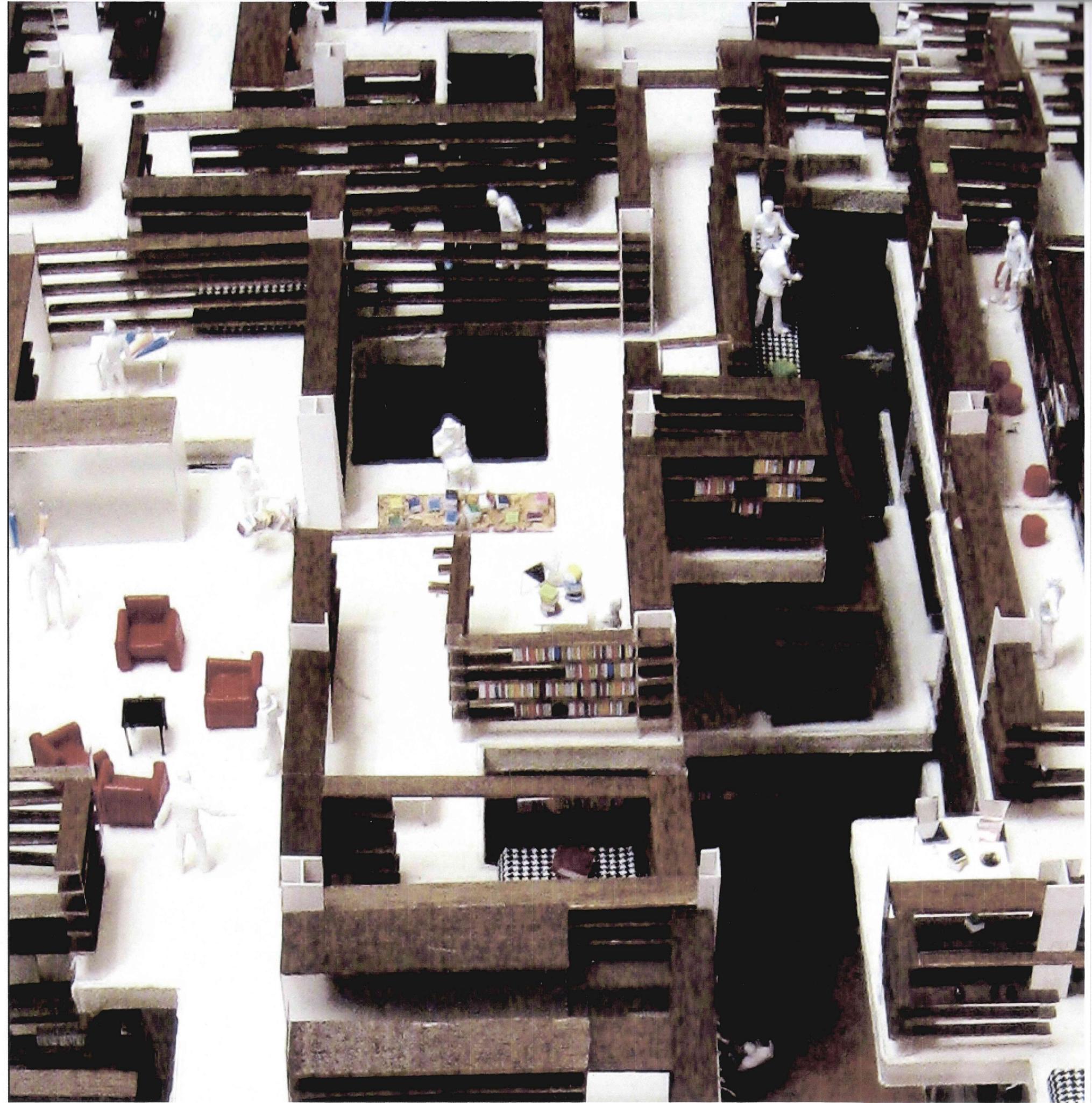


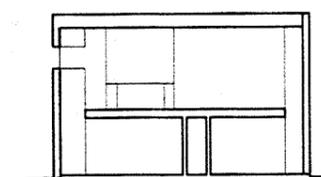
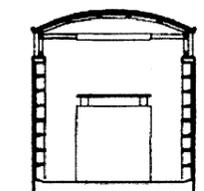
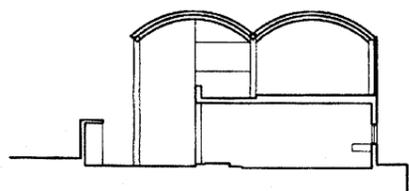
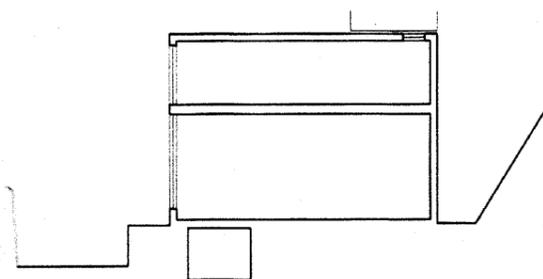
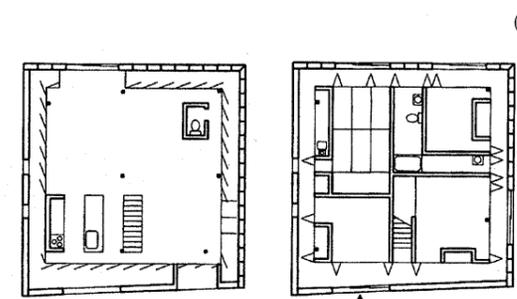
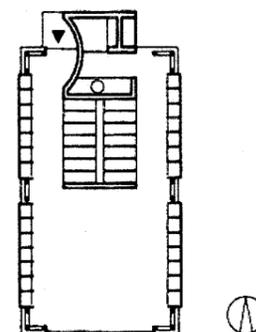
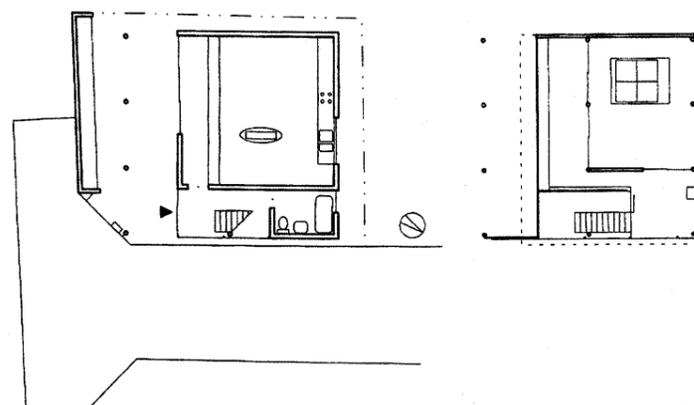
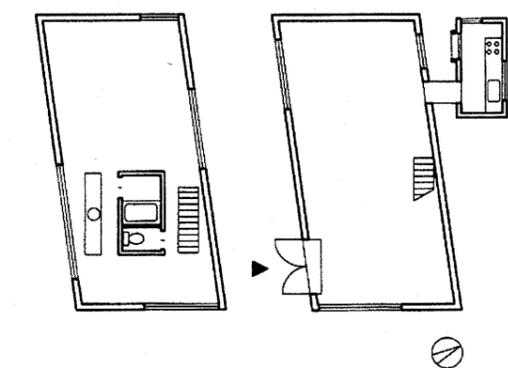


phase4 収納／領域









◇ 鎌倉の住宅

西沢立衛
木造 + 鉄筋コンクリート造
地下1階 地上2階
139.95 m²
50.08 m²
103.03 m²
地階 9.00 m²
1階 50.08 m²
2階 43.95 m²
2000年
『住宅特集』2001年10月号

◇ 馬込沢の家

伊東豊雄
鉄筋コンクリート造 + 鉄骨造
地上2階
100.00 m²
49.65 m²
81.18 m²
1階 48.63 m²
2階 32.55 m²
1986年
『住宅特集』86年9月号

◇ 詩人の書庫

坂茂
紙管トラス構造
地上2階
270.83 m²
35.79 m²
42.78 m²
—
1991年
『SD』92年5月

◇ S-HOUSE

妹島和代 + 西沢立衛 / SANAA
木造
地上2階
131.32
86.85
142.39
1階 86.85
2階 55.54
1996年
『住宅特集』97年2月号、『GA JAPAN 28』
『GA HOUSES 54』、『GA HOUSES 73』

<鎌倉の住宅> (西沢立衛 / 2000)

この住宅には収納がない。収納を排除したことで、どちらかといえば形式のほうに表現を振り切ることで、生活 / 形式の対比を浮き上がらせている。この住宅のように収納がないのは、実際に生活するうえでモノに囲まれることになりそうであるが、その精神は逆説的ではあるがヒトの輪郭を浮かび上がらせるものであると考えられる。

<馬込沢の家> (伊東豊雄 / 1986)

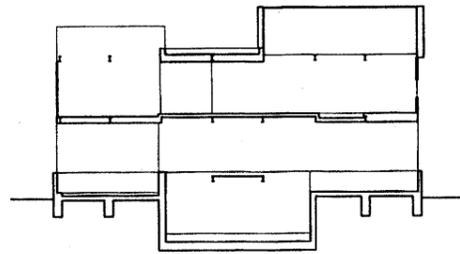
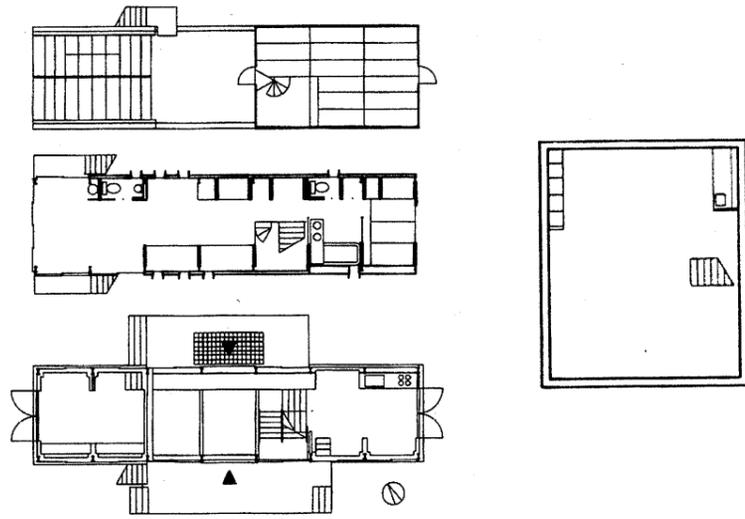
この住宅には収納がない。全体は、コンクリートの箱の上に鉄骨の二連ヴォールトが載り、敷地境界に対してエキスパンドメタルのスクリーンをまわす。これにより生活領域は極端に半外部化されることになる。この半外部の領域を敷地の外から隔てるように、高さ1.6m、長さ7mの収納が塀の代わりをする。一般的に言えば、内部が生活の領域に強く対応しているが、この住宅では収納の扱いによってこの対応がズレて、むしろ内部が形式性に、外部が生活の領域に対応している。この修辭的なズレによって、内部 / 外部、生活 / 形式という二つの対比軸の存在が意識されるようになる。

<詩人の書庫> (坂茂 / 1991)

これは本棚に囲まれた部屋で部屋自体が収納になっている。壁面を自分の蔵書で埋め尽くすという意味では、モノとヒトとの区別がなくなっていく方向である。

<S-HOUSE> (妹島和代 + 西沢立衛 / SANAA / 1996)

この住宅では、部屋と収納の区別をなくそうとしているように見える。外壁から廊下のぶんだけ内側にオフセットした一階中央に、個室や水回りや収納を収めたヴォリュームがあり、その表面にはラワン合板のパネルや扉によって等しく仕上げられているので、どの扉が収納で、どの扉が部屋かわからなくなっている。このため、回廊部分は永遠に塗切れることのない反復性を獲得した住宅ばなれしたスペースになる。ここでは窓がないという意味で、個室も収納も同じ扱いである。部屋と収納の違いは、扉のデザインなどの記号性によるものではなく、窓との関係性によるものとなっている。

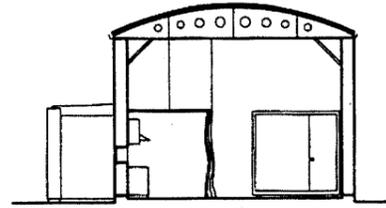
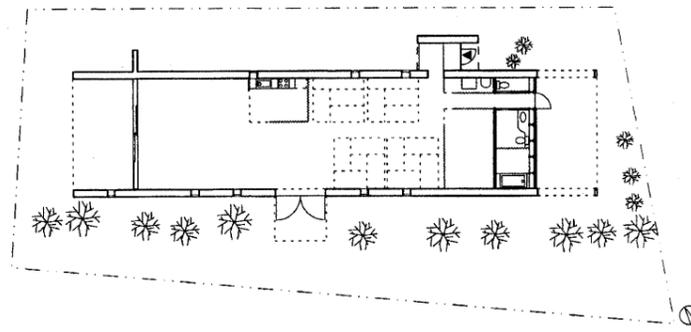


◇ ライムハウス

北山恒
鉄骨造+鉄筋コンクリート造
地下1階 地上3階
167.28㎡
49.00㎡
154.24㎡
地階 41.80㎡
1階 42.00㎡
2階 48.24㎡
3階 22.2㎡
1997年
『住宅特集』99年5月号

<ライムハウス>(北山恒/1997)

「みぞベッド」名付けられた仕掛けは、収納の一部が寝台(H=600,W=907,L=1900)になっていて、扉を開くことによって極小の寝室を発生させる。アイデアとしては、和室の押入れ上段に布団を敷いて、そこに上がりこんで寝ると変わらないが、そういう通常ならユーザーが勝手に始める場所の使い方が、設計にフィードバックされることによって、この住宅からは、屋間はほとんど使われることのないベッドと寝室がなくなっている。

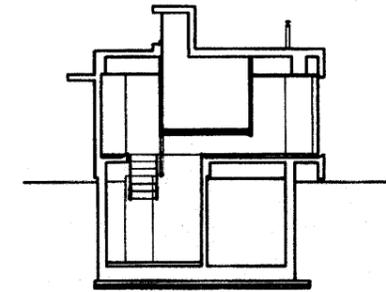
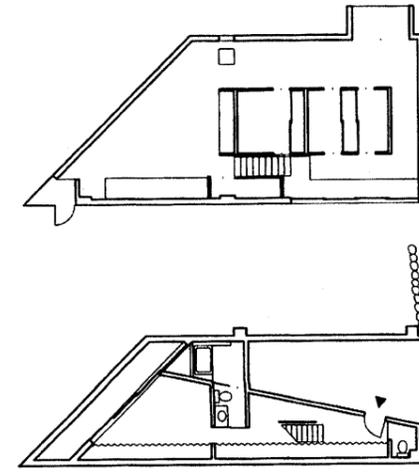


◇ はだかの家

坂茂
木造
地上1階
516.2㎡
183.0㎡
138.5㎡
1階 138.5㎡
2000年
『住宅特集』2001年1月号

<はだかの家>(坂茂/2000)

ワンルールの広がり最大化しようとするのがこの家である。この作品では水回りとエアコンと開口部だけが固定されていて、四つの個室が四畳半の「可動室」というキャスター付のものになっている。扉で開閉できて、キャスターが付いて可動であるという意味でこれは収納を手本にした部屋といえる。ワンルールの中で、この可動室が連結したり、エアコンの付いた壁に接続したり、テラスのほうに出ていったりして、フレキシブルに使われることになる。物の収納は水回り脇のカーテンで仕切られた一画に収められていて、可動室の中でモノとヒトが混ざることはない。



◇ L

青木淳
鉄筋コンクリート造+鉄骨造
地下1階 地上1階
165.30㎡
76.60㎡
164.21㎡
地階 74.01㎡
1階 90.20㎡
1999年
『住宅特集』2000年4月号

<L>(青木淳/1999)

この住宅では二階のワンルールの空間に、寝室ともベッドの箱とも収納ともつかぬものによって、寝る場所が確保されている。この箱の内部は各自のワードローブで細かく分割されていて、さらに居間側から使える収納が組み込まれている。つまりこの箱の中に、ヒトもモノも一緒に収納してしまうようになっている。ここでは「寝る」ことは「身体を収納する」ことである。寝室やベッドが、収納に取り込まれてしまったと捉えるならば、家があり、その中に部屋があり、その中に収納や家具があり、といった階層性が、寝るところで壊されているともいえる。この住宅が生き活きとしているのは、この寝る部分に限らずいろんな場所で、出来合いのやり方に頼らず、こうしたモノとヒトの振る舞いの関係が再構成されているからだと考えられる。

参考文献・参考資料

「現代住宅研究」 塚本由晴＋西沢大良 INAX 出版 2004年

「集合住宅をユニットから考える」 渡辺真理＋木下鷹子、新建築社、2006

「ルイス・カーンの空間構成—アクソメで読む20世紀の建築家たち」 原口秀昭、彰国社、2000

「CORPORATE HOUSING & TRAINING FACILITIES New Concepts in Architecture & Design 現代建築集成／寮・保養所・研修施設」 監修 水谷碩之、メイセイ出版、1996

文京区役所 <http://www.city.bunkyo.g.jp>

月間地域まちづくり <http://www.chiki-dukuri-hyakka.or.jp/book/monthly/index.htm>

日本的景観を再考する

都市デザイナー・東京大学大学院助教授（都市工学専攻）

北沢猛

謝辞

思考的なことに陥りがちな私を、しっかりと建築としての取り組みに軌道修正してくださる富永先生、並びに、諸先生方に感謝します。

弱音を受け止めながらも、最後まで力を信じてくれた家族に感謝します。

最後まで、“みんなで”がんばろうと、暗黙にも信じあったゼミの仲間
に感謝します。

叶えたい寮生活のように、苦しい中にも楽しみを見出しながら手伝ってく
れた西川君、水谷君に感謝します。

色んな時間を共有して話し相手になってくれたシミーに感謝します。

突然の頼みにも紳士に取り組んでくれた関本さん、
全てを知り尽くし、常にやさしく温かく支えてくれた、妹・香織、
癖を知り、最大限にヤル気を起こさせる声をかけてくれた、要子さん
つたない考えを建築へと結びつける色んな思考を教えてくれた後藤さん
に感謝します。

ヒトを支えられる強いヒトになりたい。

弱さを知る機会となった修士設計そのものに感謝します。